



特225
622

土佐の偉人と名勝



始



特225
622



偉人と名勝

高知市教育會編





土佐の歴史



はしがき

南海土州の地、峻峻洪濤人を化する剛健にして、夙に健依別の名あり。加ふるに慷慨の氣を幾多流人の悲憤憤氣に享け、更に南海の學流仁義の志操を涵ふこと四百年、先哲偉人の遺紹昭々として青史不滅の光輝たり。東西山野所在の史蹟亦垂訓切々轉々懷古讚仰の情に禁へざらしむ。是れを顯彰し、是れを繼承せんとする。豈に吾人の責務たらずして何ぞや。

茲に此の眇冊を刊行する所以のもの素より如上の見に基き、而も期する處は土佐觀光の資料たらしめんとするにあり。従つて記する處梗概に過ぎず。附録するに名勝景觀を以てし題して「土佐の偉人と名勝」といふ。筆者もとより史實に暗く文才に乏し、而も敢て是れを世に公にするに至れるもの、幸郷土史家小關豊吉先生の嚴閑叱正を受くるを得ずして豈に是れあるを得んや。記して以て深謝の意を表す。

昭和十二年二月

著述責任者識す

目次

偉人年代表

一、大高坂松王丸

二、僧 義 堂

三、僧 絶 堂

四、長宗我部元親

五、吉 良 宣 經

六、山 内 一 豊

七、谷 中 時

八、小 倉 三 省

九、野 中 兼 山

十、大高坂 芝 山

十一、谷 秦 山

十二、中 山 高 陽

十三、川 谷 菊 山

十四、谷 眞 潮

十五、武 藤 致 和

十六、鹿 持 雅 澄

十七、小 南 良 和

十八、吉 田 東 洋

十九、山 内 豊 信

二十、武 市 瑞 山

二十一、河 野 敏 録

吉野朝時代土佐勤王の首領

足利時代五山禪師の大徳

同

戦國時代土佐領主

弘岡城主

土佐第一代藩主

土佐南學の祖

土佐藩賢相

同

南學者

土佐南學中興の祖

土佐書壇の巨擘

土佐算學の鼻祖

國學者

地理、歴史家

國學者

土藩賢相

同

第十五代藩主、維新の元勳

土佐勤王黨の首領

明治の政治家

一

二

三

三

四

五

六

六

七

八

九

九

〇

〇

一

二

三

三

四

五

六

慶承明萬天延貞元正寶元貞天延寬萬明承慶
 安應曆治文寶和享永德保文保德永祿享和寶文治曆應安

三四三三八八九八三三四三五〇三七六四三八三三三四
 一九四二四一六三二二二二二二二二二二二二二二二二二二

雅) — 3
 — 9 — (山 薊) — 4 8 — (山 秦) — 8
 — 12 —
 — 9 — (陽 高) — 2
 — 10 — (和 致) — 5
 — 9 — (湖 眞) — 12
 — 3 — (山 鏡)
 — 3 — (山 芝) —

正寬元慶文天元永弘天享大永文明延長文應文寬長康享
 保永和長祿正龜祿治文祿永正龜應德享明仁政正錄正德

四〇九一九四九三三三三三三三三三三三三三三三三三三
 三〇三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三

4 — (親 元) — 8
 14 — (豐 一) — 14
 (中 時) — 4
 省三) — 9
 元
 4

天弘私嘉安萬文元慶明
保化永政延久治應治
昭大
和正

至自

一〇三三二一〇二五四四三三三二二〇一〇一三一一六一六四四

一〇
六七五七六七八九〇

		5/68	(澄)	
	15/71		(和良)	
		2/48	(洋東)	
		5/46	(堂容)	10
		37/37	(山瑞)	12
		3/49	(八唯)	12
	24		(錄敏)	明不
		2/30	(浪滄)	5
12/98			(郎次潤)	5
	18/52		(郎太彌)	5
		3/29	(郎二収)	6
		3/33	(馬龍)	6
	44/75		(城干)	8
8/83			(助退)	8
		2/26	(郎太寅)	9
	38/66		(郎次象)	9
	42/88		(行高)	9
8/85			(弟孝)	11
7/86			(元久)	13
	6/31		(吉健)	1
	19/41		(範豊)	2
	34/55		(民兆)	4
		3/25	(章元)	4
		21/39	(猪辰)	3
12/66			(雄速)	5
14/57			(月桂)	2
6/62			(幸雄)	3

四

一、大高坂松王丸

大高坂松王丸は大高坂郷（現在の高知市地方）の総領にして大高坂城主なり。延元元年居城に據りて義旗を揚げ、孤忠無援而も聊も屈せず、安樂寺城の足利方と交戦數度に勝敗あり。延元二年（土佐編年記事略による）後醍醐天皇の第七皇子花園宮滿良親王土佐に下國せらるゝや相應じて一時南風大に競ふ。然るに延元四年十二月敵將細川律師定禪等大舉來り攻むるに會ひ武運拙なくして翌興國元年正月廿五日松王丸遂に戦死して城陥り、花園宮は中國に落ち給ふと傳へらる。高知市役所構内大銀杏樹下は松王丸の墳墓の地と稱せられ、同所大高坂神社は其の靈を祀る所なり。

松王丸が孤軍奮闘克く誠忠を竭して土佐勤王の先驅をなしたる勳功は恰も大楠公の孤忠にも比儔すべく、實に千古不朽の光輝たり。大正八年從四位を追贈せらる。

一、僧 義 堂

正中二年高岡郡津野山郷に生る。空華道人と號す。幼より穎悟八才にして臨濟録を讀む。長じて神氣益々秀で、器局頗る淵偉なり。十四才にして落飾し、習年叡山に上りて戒を受け、曆應四年京洛臨川寺に夢窓國師に謁し禪學を修む。天龍寺に居る事九年正平十五年同寺の幹事に任せられ、翌年建仁寺に入りて教を龍山に受く。師切りに其の偉器を嘆賞すといふ。正平十四年三十五才管領基氏の懇請により東下して圓覺泉瑞寺に居り又善福寺に移る。建徳二年上杉氏の爲に報恩寺を開きて居ること數年、天授五年五十六才、將軍義滿の聘により等持寺に寓し後建仁寺、南禪寺等にあり、義滿の爲に政機に參し或は學を講じ道

を説く元中五年病を得て終に癒えず、四月年六十四にして入寂す。

三、僧 絶 海

義堂に後るゝ事十一年、義堂と同じく高岡郡津野山郷に生る。蕉堅道人と號す。氣象豪邁にして才氣煥發、一代の俊髦なり。年十三才上洛して天龍寺に入り、夢想國師に師事す。讀後一遍卷を閉ぢて背誦一字を違へず、國師大に其の秀才なるを驚嘆して措かず、徒らに滯掃に役することなからしめんとするや、曰く「教外別傳いかでか文字葛藤を弄せんや」と國師愈々其の奇才を愛す。正平八年建仁寺に入り教を龍山に受け刻苦修禪十餘年學徳大に進む。正平十八年、年二十九才東下して留まること五年、建徳二年明に留學して禪を杭州全室和尚に學ぶ。時に年三十二才。其の詩賦は千古の絶唱と稱せられ、洪武帝に謁して一詩を呈し叡感を賜ふ。滯留數年歸朝の後天龍寺第一座に上り。將軍義滿の命を受けて甲州惠林寺を開く等聲名一世を歴す、然るに一度直言の禍に遭ひて阿波國寶冠寺に在りしが義滿前非を悔い上洛を懇請して止まず、仍ち還りて等持院に入るや、將軍親しく五條の袈裟を捧持して之を迎へ待遇頗る厚し、以て其の權威を想ふべし。應永八年壽六十六、相國寺に入寂するや、後小松天皇より佛智廣照國師と賜溢せらる。洵に佛師最高の榮譽なりといふべし。義堂、絶海共に時と處を同じうして、相並びて五山禪林の大徳、一世の驥足たりしは、當に郷土文化史上絢爛の光彩たり。



四、長宗我部元親

秦の始皇帝の裔、弓月君の後なり。天文八年、長岡郡岡豊城に生る。永祿三年二十二才父國親に従ひ、吾川郡長濱戸の本の初陣に當り驍勇を奮ひ、人初めて其の偉器に驚く。是れより十餘年東征西伐土佐の群雄を従へ、更に雄略克く四國を裁定し、進みて武威を上國に振はんとして秀吉の拮抗に遭ひ和を講じて、爾來土佐一國の領主たり。時に年四十七。天正十四年秀吉の命により、九州島津氏を征するや豊後戸次川に敗れて長子信親以下將兵の戦死するもの七百四十人、秀吉感狀を下して其の壯烈を嘉し、大隅國を賜ふ。元親之れを辭す。天正十六年秀吉の命により初めて土佐の檢地を行ふ。現存せる天正地檢帳是れにして後年長く土藩民政の重寶たり。天正十八年關東の北條征伐に従軍し後再度朝鮮征伐に部將として出征し共に戦功あり。元親又意を民政に用ひ慶長元年法令百ヶ條を制定して、敬神崇佛忠孝仁義を奨め尙武勸業矯風等細大洩らす所なし。又僧忍性、如淵を岡豊城に聘して儒學を講せしめ、或は上方文化を輸入して燦然たる岡豊文化を開發する所あり、親興、親實等忠臣義士の出でたる蓋故なきにあらず。即その文化的功勞亦偉なりといふへく豈一介武辨の將たるのみならんや

慶長四年五月十日病を以て伏見に歿す。享年六十一才。長濱天甫寺山に葬る。嗣子盛親乃父の木像を作りて長濱雪蹊寺に安置せるもの。現に元親を祀れる同地秦神社の寶物たり。長岡郡岡豊山、高知公園並に浦戸山はいづれも其の城趾なり。

五、吉 良 宣 經

源希義十九代の後裔にして戰國時代吾川郡弘岡の城主なり。資性溫良義に暢達し土佐七雄中に傑出す。天文年間周防の人南村梅軒漂然土佐に来るや、宣經迎へて賓師となし、老臣宣義以下家臣と共に就きて程朱の學を問ふ。土佐南學の播種せられたる實に此處にあり。天文二十年、長宗我部氏と兵を交へ土佐郡布師田の陣中に歿す。時に年三十八才。子宣直情弱にして家遂に滅ぶ。然りと雖宣經獎學の功空しからず、其の滅亡に際して一門の老若男女悉く難に殉じたる義節は土佐戰國史の一美談たるのみならず、土佐儒學の端緒此に開けて後世土佐文教の興隆に寄與せし所尠しとせず。家臣宣義亦資性忠誠義に篤く、宣經死するや屢々宣直を忠諫し、終に冤罪の爲家に綱せられしが、其の病むや敢て醫藥を却けて終に瞑す。絶世の忠烈永く人臣の龜鑑たり。

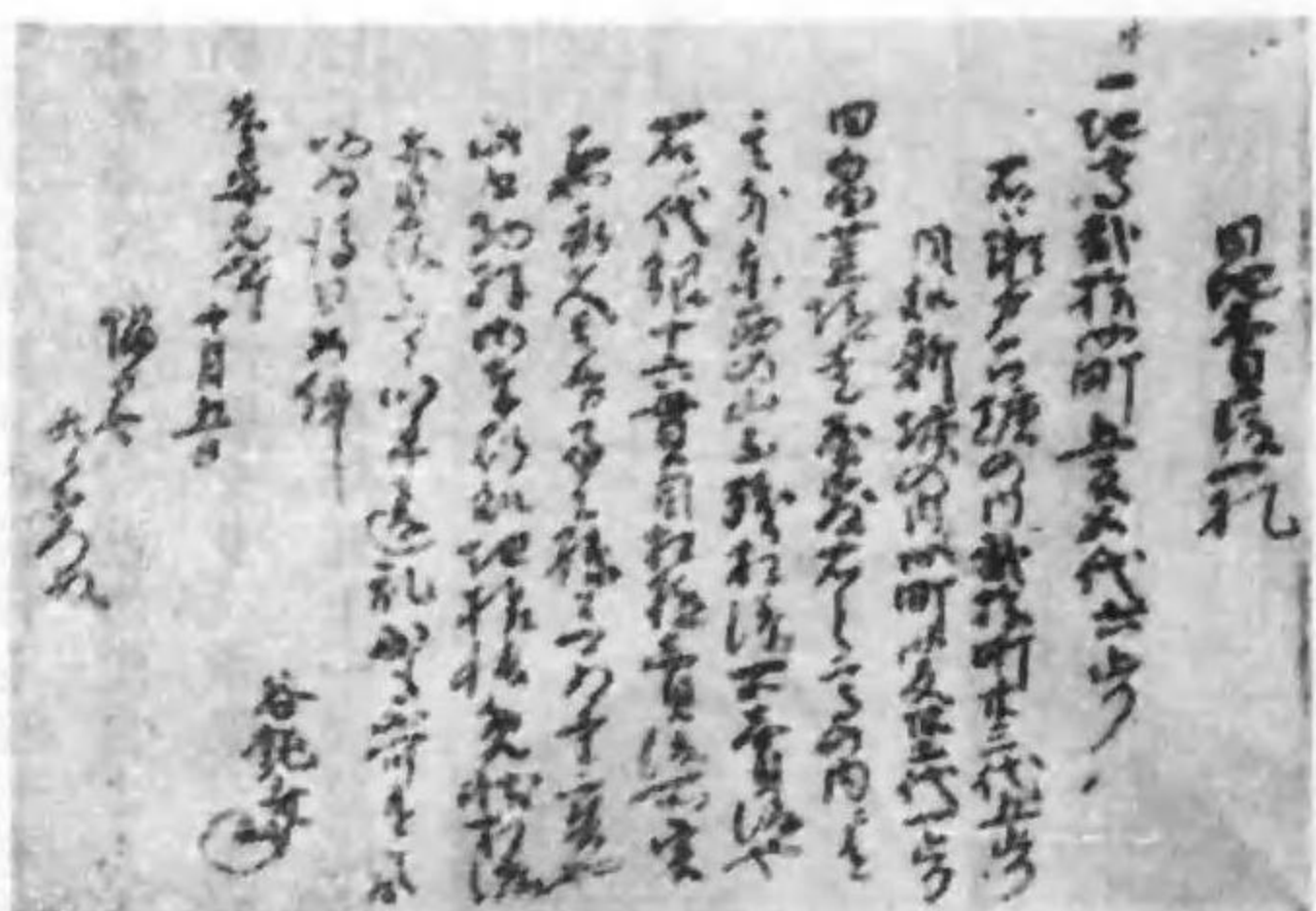
四

六、山内一豊



遠祖は藤原秀郷に出づ。天文十四年、尾張國岩倉村に生る。十三才にして父盛豐戰死してより一家流浪具に辛酸を嘗む。後織田信長に仕へ越前朝倉義景を攻むるや一矢面に立つも屈せず、三田崎勘右衛門の首級を揚げて驍名を馳す。天正元年秀吉に仕へ祿四百石を賜ふ爾後屢次の戦功により、江州長濱二萬石を賜ひ、次で天正十八年小田原陣の戦功により、遠州掛川六萬石に封せられしが、更に關ヶ原の戦後功によりて一躍土佐二十萬石に封せらる。初め浦戸城に入り後慶長八年大高坂城を築きて居城となす。現在高知公園は其の城趾なり。慶長十年病を以て薨す。年六十一歳、潮江直如寺山に葬る。公人となり重厚謹直而も戦に臨みては武勇人に勝れ、夫人若宮氏亦婦徳を以て聞ゆ。縣社藤並神社は公並に若宮夫人及び二代忠義公を祀る所、社頭の銅像は公の武風を象徴して是を不朽に傳ふ。大正八年從三位を追贈せらる。

七、谷時中



名は素有、字は時中、鈍齋と號す。人となり俊邁卓犖慶長四年安藝郡甲浦に生る。僧宗慶は其の父なり。吾川郡瀬戸村眞乗寺に移住してより、長濱雪蹊寺の僧天質に就きて儒を學ぶ大學一本を書寫して、經文に代へ朝夕之を佛前に誦讀せりといふ。各地に書籍を求め、熱心耽讀してやまず。博覽強記並ぶ者なし。天質深く其の卓見に驚嘆す。藩主に聘せられしも困辭して受けず、深く學者の天職に甘んじ學に精進して敢て餘念あるなし。洵に當世稀に見る高士の風格なりといふべし。子弟を教ふるや師道頗る嚴肅にして門弟中、野中兼山、小倉三省、山崎闇齋等の偉器を出し土佐學の開祖と稱せらる。豈偉大ならずや。先生必ずしも世儒に倣はず利財を重んじて利用厚生之道に思慮し自ら干拓事業を興して良田三百石を得たり、蓋し活儒たりといふべく。經世家たりし兼山、三省の輩出したる故なきにあらず。然りと雖子孫の或は富貴志を失はんことを慮り美田貳拾四町五反余を賣りて銀十六貫匁を得るや、一半を一子一齊の學資に供し一半を以つて書籍に代へ之を子孫に胎す。卓見當に斯くの如し。先生少壯にして狷介不屈の性行ありしと雖一度程朱の學に接してより反省修養大に力め動靜周旋尤も謹めり。慶安二年十二月晦日卒す。年五十一歳。長濱瀬戸箕越山に葬る。清川神社は先生の靈の鎮まる所なり大正四年從四位を贈らる。先生在世當時は文教未だ興らざる徳川の初期に屬し、藤原惺窩、林羅山の朱子學、中江藤樹の陽明學あるのみ、而も南海土佐の地既に時中あり。當時天下の學業をなし、師道嚴然、教學の法大に備ふ先生歿後、學統大に發展し、闇齋によりて上方に及ぶ。土佐儒學の黎明を開き南學の祖業を就せる先生の功亦偉大なりといふべし。長濱箕越山墓側の頌德碑は昭和十一年二月高知縣教育會の建設する所なり。

五

八、小倉三省

六

名は克、字は政實、三省と號す。人となり寛宏大度、身自ら奉ずること極めて薄くして人に篤く仁惠よく罪人に及ぶ。慶長九年四月八日高知城下中島町に生る。父少助政平藩に仕へて仕置役たり。兼山爲政の峻嚴なるに、少助和するに仁政を以てし共に俱に殖産興業の善政を施せる其功敢て兼山に譲らず。晉その世に喧傳せられざりしは畢章己の功を人に歸したる少助恭儉推讓の美德によるものなり、慶安元年少助吾子三省を仕置役として藩主忠義公に推薦するや、公之れを嘉納し父子相並びて藩政に當る。

三省夙に谷時中の薰陶を受け後自ら政務の餘暇を以て子弟を教へ南學の振興に偉功あり、其の藩治に當るや撰直よく人情に通じたる父少助と、恭謙温良よく人を容るゝの雅量ある三省とは兼山を補佐して當時の藩政に貢獻する所頗る多く、民皆其の徳風と仁政に悦服せり。承應三年父少助歿するや哀痛やまず數旬にして終に病を發し同年七月十五日亡父の後を追ふ。人皆哀惜してやまず。享年五十一歳墓は市外五台山長江にあり。大正十三年從四位を追贈せらる。



九、野中兼山

名は止、字は良繼、通稱傳右衛門、兼山と號す。元和元年正月二十一日播州姫路に生る。父良明は一豊公の甥なり。兼山資性聰明にして氣象剛直、叔父土州奉行直繼に養はれ年十三歳にして土佐に下る。寛永十三年二十二歳襲家して本山五千九百八十石を領し奉行職たり。夙に程朱の學を谷時中に受け、京都長崎はもとより遠く支那より經書を求めて研鑽大に努め、政務の傍ら子弟を集めて自ら講ず。

山崎闇齋曰く「あれ程の身代にて、あれ程の本を讀むものは友松勘十郎の外に野中程の人を見ず」と、以て其の篤學を知るへし。二代忠義、三代忠豐兩公に歴仕し、國政を執ること二十八年政治、經濟上稀世の奇才を以て滿腹の經論を施し、郷士の取立、新田の開墾、物部、仁淀其他の諸河川井堰の開墾、殖林、勤儉節約の奨励等悉く功を百世の後に期したる國利民福の事績枚擧に遑なく土州の山河到る處に自然的大頌徳碑を残し儒學に基づく道義の爲政は當時の陋習弊風を打破して世道人心を匡救する所頗る多く、萬代不朽の徳澤は今尙郷人の景仰讚美して措かざる所なり。然るに晩年他の國老等の嫉視する所となり、寛文三年七月自ら職を辭して香美郡中野の采邑に隱退せしが閑居五ヶ月同年十二月十五日病歿して歿す。年四十九歳、潮江高見に葬る。今を去る二百七十餘年前なり。歿後追罪四男三女に及び悉く宿毛に塾居を命せられ四男相承て歿す。嗚呼慘なる哉。婉女才名あり。晩年許されて朝倉村に住し、香美郡中野に小祠を建て、祖先を祭る。お婉堂是れなり。明治四十四年縣社春野神社を五台山上に建て、其の威靈を奉祀し翌四十五年正四位を贈らる。昭和十年十二月潮江村十日會は高知縣教育會の支援を得て墓前に頌徳碑を建て、永く先生の偉烈を顯彰す。藤並神社境内は其の邸趾にして泉石今尙殘存し、長岡郡本山町歸全山には母堂秋田夫人の墓あり。

一〇、大高坂芝山

字は清介、芝山と號し、喬松一峯黃軒等の別號あり。正保四年生る資性豪宕氣節に富む。夙に儒學を谷一齋(時中の子)に學び宏才博覽殊に詩文に長ず。寛文四年十八歳にして谷一齋に従ひて京都に上る。同六年江戸に移り幾くもなく儒を以て内藤、松山、稻葉の諸侯に歴仕して機務に興る。元祿九年致仕して晩年専ら詩文を娛しみ、正徳三年五月、六十七歳を以て歿す。芝山自ら信すること最も強く、南學傳を著して其の學統を傳へ、適從録を作りて程朱を擁護し、伊藤仁齋の古學を排す。蓋し南學者中の闘士なり。著はす所の喬松子存一書は彼の學説と其の主張を見るべき名著なり。

七

林 密 齋 香 子

室 乃 城 秋 然

玉 風 子 月 夜 別

秦 山 墨 史

十一、谷 秦 山

諱は重遠、通稱丹三郎、秦山と號す。寛文三年三月十一日長岡郡江村郷八幡村に生る。家代々八幡宮の神職なり。重遠幼より聰明俊敏群童に絶し、四歳にして高知城下に寓居し、九歳始めて學に就く。延寶七年十七歳上京して淺見綱齋の門に入り次々山崎闇齋に師事す。翌八年歸國してより常に書を闇齋綱齋に寄せて以て疑を質す。然れども後數年ならずして儒從神主の見を持ち書を綱齋にいたして痛論するに至る。元祿の初年にありては赤貧洗ふが如し。一念研學夙夜怠らず。同七年以後書を江戸の澁川春海に寄せ天文、曆學、神道を問ひ、八年始めて渾天儀を作り夜間山上にありて天文を測る等刻苦精勵大に學に進み、遂に印可免狀を受く。元祿十三年香美郡山田野に移りしが同十五年仕官し十人扶持を賜ひて城下に初めて日本記神代卷を講するや講筵に列するもの六十餘人、爾後土佐の皇學大に起る畢竟先生の功に因る所多し、同十六年再び香美郡山田野に移り住み、城下の子弟遠しとせずして來り學ぶもの多し。寛永元年四十二歳東遊して途次、神社を參拜し名勝を探り江戸に於ては春海、伊勢に於ては荒木田經晃に就て神道を問ひ、更に京都に淺見綱齋、度會延經安倍泰福を訪れて同年歸國し東遊紀行二卷を著はす。寶永四年四月六日深尾重方の事に連座せるものとして冤罪をうけ山田に禁錮せらるる時に年四十五歳、爾來十二年敢て怨色なく研學只是れ力めて倦まず。其他當時國中の名社の荒廢せるを歎きて土左國式社考を出し尙秦山集四十九卷の外神代卷塩土傳及び中臣祓塩土傳、保建大記打聞等の著あり。吾が神道、皇國の精神を宣揚す。實に土佐南學再興の恩人にして洵に百世の師なり。享保三年赦に遇ひしが同年六月三十日病みて歿す。年五十六歳茶蓐谷に葬る。大正八年正五位を贈らる。市外秦泉寺は先生二十一歳よりの寓居

の遺跡にして號秦山はこれに因む所なり。

長子丹四郎垣守克く家學を繼ぎ國典歌道に通じ藩主に仕へて侍讀たり。京に上りて玉木葦齋に學び神道の奥義を究む孫丹内眞潮亦家名を墜さざること後述の如く三代相傳へて土佐學界に貢獻せる洵に異數なりと言ふべし。

十二、中 山 高 陽

通稱阿波屋清右衛門、高陽山人又は醉墨仙人、松石齋、江竹居と號す。享保二年城下堺町使者屋橋南詰に生る。新羅三郎義光の裔なりといふ。幼時より繪を好みて彭城百川に倣ひ又書を江戸の關鳳關に學ぶ。寛延元年三十二歳一度近畿に遊び同八年四十二歳にして再び京阪を経て江戸に上り書は蘇東坡を、畫は梅道人等を學び共に一派を成す。就中山水、人物に最も妙を得、書畫篆の三藝は實に高陽の三絶技と稱せらる。當時天下の名家、井上金嶽、源東江と訂交し聲名共に一世に高し、由來土佐の地古來藝術の達人を産すること少しといへども稀に此の人あるは異彩なりといふべし、安永九年三月十二日歿し蘆野山中に葬る。年六十四歳。



十三、川 谷 蘆 山

安藝郡野根村の人なり。名は致眞、蘆山と號す。山内家に仕へ蘆野村に住す。因て其の號あり。夙く神儒の學を谷垣守に受く。元文三年江戸に上り豊島家に入門して數學の蘊奥を究め歸國して子弟を教授す。是れより算學漸く藩内に興るに至る。又曆學

に通じ寶曆十三年官曆載せざるに其年九月朔日の日蝕を豫測して現象正に違はず。是れより海内無双の聲名噴々として上方に喧傳せらる。藩主深く其の博識を賞し擢でて士格に列す。其他神道に通じ詩歌をよくす。明治六年十月七日病みて卒し薊野山中に葬る。時に年六十四歳。著はす所、改旋曆、薊山集等あり。

十四、谷 眞 潮

享保十四年小高坂櫻馬場に生る。碩學泰山の孫、丹四郎垣守の長男なり。通稱母内、北溪と號す。資性聰明豪快幼より家學を學び兼ねて儒學兵學に通じ神道は必ずしも家傳によらず自己一家の見立つ又政治を好みて活儒たり。寶曆七年三十一歳小姓格を以て侍讀となり。三十四歳にして學館教授役に進み安永七年浦奉行として室戸港改修工事を監す。天明七年藩主豊雅公の藩政改革は所謂天明の改革にして土州藩治上の特筆事なり。此際眞潮郡奉行兼普譜奉行より次で大目附として献替盡瘁する所頗る多く、藩主の親任最も篤し。藩制曾て儒者を以て樞機に當らしむることなかりしが、そのこれあるは眞潮を以て嚆矢となす。藩主豊雅薨するや政務を辭して再び教授役となり、寛政九年十月十七日享年七十一歳を以て卒し秦泉寺に葬る。大正十三年三月正五位を贈らる。著はす所、神道本論、論聖、論佛外數種あり。

十五、武 藤 致 和

遠祖は藤原氏、美濃國に住し、山内氏入國の後土佐に下り自ら請うて土籍を脱し商賈となり美濃屋と稱す。國學を好み、古典に通せしのみならず特に土佐の地理歴史に精通し研究調査二十餘年遂に南路志百余卷を大成す。土佐郷土史研究上の重寶なり

文化十年九月五日歿す。年七十三歳潮江に葬る。男平道父の志を嗣ぎて國學を研究し名を成すに至る。

十六、鹿 持 雅 澄

幡多郡中村一條家の臣、飛鳥井雅量郷に出づ、雅量は同郡鹿持村に居り因つて氏となす。雅澄古義軒又は山齋と號す。寛政三年四月廿七日土佐郡福井村に生る。幼時明敏を缺くと雖、文化五年十八歳にして初めて學に志し儒學と國學と和歌を學び進境著し。二十二歳の頃より専ら力を國學の研究に注ぎ更に萬葉の研究を以て畢世の大事業とし寢食を忘れて之に没頭せり



贈正五位鹿持雅澄像

先生家貧にして書籍を求むること意に任せず只家老福岡氏並に藩校總裁公子大隅君の俠授によりて其の志業を進むるを得たり加ふるに天保七年夫人菊子を亡ひてよりは再び娶らず老父の奉養、幼兒の撫育等辛酸具さに嘗む。而も研學夙夜懈らず終始致々數十年稀代の名著萬葉集古義九十五卷の外數十部の著を大成す。蓋し萬葉研究上不可缺の重寶にして實に皇國の寶典たり。明治聖代に及びて萬葉集古義は畏くも勅版の光榮に浴す。洵に學者最高の榮譽なりといふべし。又傍ら歌學を修め其の長歌は加茂眞淵の壘を摩するに至る。山齋集及び千首の繰言の歌集あり。安政五年八月十九日年六十八歳を以て病歿し福井村先塋の次に葬る。

先生曾て足一度も藩外に出でず。生來榮達を望まず爲に當時盛名を誦はるゝに至らず。自ら身後百世の功を期したる高風卓見は眞に學者の權化たり。其の學訓は存寄書、山齋集に明なるが如く敬神崇祖尊王愛國の至誠を以て一貫し、其の門人に武市半平太、吉田東洋等幾多の偉才を出し兒孫亦多く國家有用の材たりし蓋故なきにあらず、吾が國體の精華を闡明して土佐精神に一段の生氣を附與したる偉功は當に千載不朽なりといふべし。大正四年正五位を贈らる墓上に題する一首

「われゆ後生れん人は古言の吾學し道に草な生しそ」と
墓前の頌徳碑は昭和十一年高知縣教育會の建設に係る。

十七、小南良和

明和九年、高知縣に生る。通稱五郎右衛門、後五郎と稱す。家世々山内家に仕ふ。資性重厚沈毅而も果斷に富む。天保七年、廿五歳にして藩主豊資の扈從となり、翌年世子豊熙の近侍となる。天保十四年豊熙藩主となるや良和信任せらるゝこと益々厚く献替頗る力めて藩治大に揚り、士藩中興の治と稱せらる。嘉永元年藩公薨するや潮江山なる墓側にて喪に服すること五十日、同年十四代豊懋後第五代豊信公に仕へて側用役となり吉田東洋と共に信任を得、直諫譚る所なく君臣の交水魚の如し。安政五年戊午の大獄藩公に及び鮫洲に幽せらるゝや良和亦幡多郡佐賀村に流されしもやがて赦免せらる。文久二年吉田東洋横死の後良和亦大監察兼仕置役となり藩公に従ひて上洛し又勅使を護衛して關東に下る。當時天下の風雲愈急にして良和亦藩勤王の士と交はり大に國事に奔走す。然るに良和もと武市瑞山と意氣相投し瑞山の斷獄と同時に良和亦罪を得たりしも再び大監察となり戊申の役東征に従ひて軍功あり。維新後屢々官途に召されしも老齡の故を以て固辭し、明治十五年二月二十七日、七十一歳を以て歿し秦泉寺天場山に葬る。明治三十一年從四位を追贈せらる。

文化九年江ノ口村に生る。通稱五郎右衛門、後五郎と稱す。家世々山内家に仕ふ。資性重厚沈毅而も果斷に富む。天保七年、廿五歳にして藩主豊資の扈從となり、翌年世子豊熙の近侍となる。天保十四年豊熙藩主となるや良和信任せらるゝこと益々厚く献替頗る力めて藩治大に揚り、士藩中興の治と稱せらる。嘉永元年藩公薨するや潮江山なる墓側にて喪に服すること五十日、同年十四代豊懋後第五代豊信公に仕へて側用役となり吉田東洋と共に信任を得、直諫譚る所なく君臣の交水魚の如し。安政五年戊午の大獄藩公に及び鮫洲に幽せらるゝや良和亦幡多郡佐賀村に流されしもやがて赦免せらる。文久二年吉田東洋横死の後良和亦大監察兼仕置役となり藩公に従ひて上洛し又勅使を護衛して關東に下る。當時天下の風雲愈急にして良和亦藩勤王の士と交はり大に國事に奔走す。然るに良和もと武市瑞山と意氣相投し瑞山の斷獄と同時に良和亦罪を得たりしも再び大監察となり戊申の役東征に従ひて軍功あり。維新後屢々官途に召されしも老齡の故を以て固辭し、明治十五年二月二十七日、七十一歳を以て歿し秦泉寺天場山に葬る。明治三十一年從四位を追贈せらる。



十八、吉田東洋

文化十三年、城下帯屋町に生る。祖先是長宗我部氏に仕へ後山内家の家臣たり。通稱元吉、名は政秋、東洋と號す。十五歳にして一刀流を學び、十八歳の時、中村十次郎に就きて漢學を修め、更に又鹿持雅澄に和文を學び學問大に進む。弘化四年、船奉行に任ぜられ、越へて嘉永二年、郡奉行に轉じ、時事五箇條を建白して抱負を述ぶ。習年再び船奉行に任ぜられ諸政を改めて治績多し。其の後一時官を辭して文墨に親しみ、或は京阪を経て伊勢に遊びしが、米糶渡來して、幕末の風雲愈々急なるや、嘉永六年三十七歳、再び藩主豊信公に拔擢せられ命によりて外交意見書及び海防建議書を上るや頗る上意に適ひて信任舊に倍す。進んで參政に任ぜられ鞠躬盡瘁藩政の改革に當る。翌年江戸に在りて、幕臣松下嘉兵衛の失禮を懲らせしより藩公の嚴譴を受け歸國蟄居を命ぜられて初め朝倉にあり次で長濱に移り此處に鶴田塾を開きて子弟を教ふること五年、後藤象二郎、福岡孝弟、岩崎彌太郎等門下俊才多し。安政五年正月、時勢益々急にして人材を望むこと切なり。仍て赦されて再び參政に任じ、大に意を人材の養成に用ひて文武館を設け或は政典を定むる等新奇の治績着々として揚る。然るに尊攘の論に拮抗し、公武合體論を堅持し、開國進取の見に立ちて群毀を意とせず。加之藩の門閥家中にも東洋の新政策を快とせるもの少からず。是を以て文久二年四月八日勤王黨の反感を受けて暗殺せらるゝ處となる。時に年四十八、潮江高見に葬る。東洋天資俊邁にして學殖深遠、識見一世に卓越し眞に稀世の英傑なり。然るに不幸時難に墜れて、維新の聖代に遭ふを得ざりしは嘗に東洋一個の恨事に止まらざるなり。



十九、山内豊信

天資聰明英邁、嶄然として當時の諸侯に傑出す。文政十年十月九日追手筋屋敷（天理教會敷地）に生る。嘉永元年二十二歳、封を襲ぎて第十五代藩主となる。内は賢臣を登用して藩治を刷新し、外は國事に奔走して時局の收拾に至誠を竭す。外船渡來後尊王攘夷の論喧々たり、豊信乃ち或は幕政の改革に

或は公武の合體に日夜心膽を碎き幕府に對して侃々の建言一再にしてやまず、其の精忠義烈燃ゆるが如し。然るに遂に安政戊午の大獄に當り致仕して封を世嗣豊範に護り次で塾居を命ぜられて品川鮫洲に閑居す。文久二年國歩愈々多難なるや、幕命を奉じて再び幕政の樞機に參與し、勅使の下向に當りても公武の間に苦慮斡旋大に努め勅使をして其の大任を全からしむるに與つて力あり。既にして京都に參朝し、松平慶永、伊達宗城、島津久光と共に公武の間に周旋し、慶應三年、當時の情勢を達觀して狂瀾を既倒に廻さんとし、其臣後藤象二郎、福岡孝弟をして大政奉還を將軍に建白せしめ以つて維新の大業を翼贊せしは維新史上不朽の偉勳なりといふべく、續いて小御所の會議に於ては官武一途、新政の公明正大なるべきを痛論して岩倉公並に薩長兩藩と相合はず。既にして討幕の錦旗翻るに至るや、全力を朝家に捧げ東北を征して軍功あり。王政復古に當りて議定に任ぜられ、幕で内閣事務總裁、議事體裁取調總裁、上局議長、學校知學事に歴任し、明治二年從二位權中納言に進みしが幾くもなくして官を辭して後畏くも至尊の諮詢に備はり、更に正二位に叙せらる。明治五年六月二十一日薨す年四十六歳、品川鮫洲に葬る。其日從一位に敘せられ、誄詞を賜ふ。人臣の榮極まれりと言ふべし。公詩歌、書道に長じ、又酒を好み、時には議論風發氣焰當るべからず。曾て藤田東湖の「衆を容るは人君の徳なり」の語に感じ以て容堂を號す。尙九十九洋外史、東海外史、春村桑者、五斗先生、水竹人等の號あり。

別格官幣社山内神社は、豊信公を奉祀し豊範公を配祀する所にして、高知公園二の丸には公の銅像あり。

二十、武市瑞山



通稱半平太、諱は小盾、瑞山と號す。文政十二年九月廿七日長岡郡吹井村に生る。家代々郷士なり。瑞山人となり沈毅寡言にして風貌雄偉十四歳にして高知城下新町千頭傳四郎に入門して剣道を學び又和歌、

繪畫に長ず。嘉永三年二十二歳、高知城下田淵に轉居し、安政元年剣道槍術の道場を開きて門弟に指導す。同年八月藩命を受け剣道修業の爲江戸に上りて桃井春藏の門に入り手腕を認められて塾頭に擧げらる。櫻田門外の變後九州を歴遊して劍客と訂交し傍ら天下の形勢を視察して感ずる所あり。文久元年再度上京して、久坂玄瑞、桂小五郎、高杉晋作等廣く天下の志士に交はり、勤王の士氣愈固し同年八月遂に勤王同盟を結ぶや海南熱血の志士血盟するもの百九十二人瑞山是れが首領たり。藩廳に對して勤王討幕の藩是を定められん事を建議すること屢次、而も容れられず、當時參政吉田元吉固く公武合體の説を執り藩論容易に決せず、而も長州其他に於ては尊王討幕の氣勢愈々揚り形勢最早や猶豫するを許さざるものあり。志士の憤慨其の極に達し文久二年四月八日夜遂に同志、那須重民、安岡正言、大石圓藏の三人吉田參政の下城歸郷を途に要して之を暗殺す。斯くて藩廳重役の大改革行はれて藩論漸く勤王黨に傾くや瑞山藩主に扈從して入朝の上、三條、中山の朝臣其他志士の間に奔走して勅使三條實美の東下を斡旋し十月これを護して江戸に下る。當時勤王黨の得意想ふべし。然るに藩論再び勤王黨に利ありず。平井收二郎、間崎滄浪等同志の拘禁せられ中岡慎太郎等脱藩するもの亦相つき、或は吉村寅太郎等義兵を大和に擧ぐるあり天下の形勢愈々切迫せるを以て容堂公に苦衷を懇へ侃諤の議を致す。而も納るゝ所とならず、文久三年九月二十一日吉田參政暗殺に關して罪を得、終に獄に下さる。同志の投獄せらるゝもの前後數人、實弟田内衛吉亦其の中にあり。翌元治元年七月

中甸瑞山獄中一詩を賦して曰く

花依清香愛 人以仁義榮
幽囚何可恥 只有赤心明 と

在獄二年、其の間拷問呵責頗る酷なるも敢て屈せず。慶應元年閏五月十一日終に帯屋町南會所にて切腹を命せられ従容として節に殉す年三十有七、翌日生地吹井に葬る。明治二十四年正四位を贈らる。吹井には舊邸尙現存し、帯屋町終焉の所に碑あり。

後月輪東山 惠義志等手改良地 御陵子額定而 号計歳以玖佐乃 河野敏鎌

城下北奉公人町に生る。人となり沈毅果斷、文久元年江戸に上りて安井息軒の門に入る。武市瑞山と交はりて其の瑞王同盟に参加し瑞山と共に下國して勤王血盟の爲に奔走す。文久二年吉田參政横死の後六月藩主に從ひて入京せしが、間もなく歸國し遂に此の年十月五十人組の一人として脱藩し、上京して平井隈山と共に王事に努む。翌三年藩論一變して九月二十一日瑞山と共に下獄せしが凛然節を守りて屈せず。遂に永久牢舎の宣告を受く。爾來在獄三年維新に到りて赦免せらる。明治新政に際し司法省に出仕し、進みて權大判事となり、明治七年裁判長として江藤新平の罪を獄じ、十四年西南役後四萬二千七百四十人の徒黨を斷非するに片言事實を摘發すること神の如し。十八年子爵を授けられ、廿五年農商務大臣に任ぜられ、次で司法、内務兩大臣を兼攝し更に文部大臣に專任せしが、明治廿八年四月廿六日病を以て薨す。

二十二、小笠原唯八

文政十二年、城北江ノ口大川筋に生る。後、牧野茂敬といふ。資性精悍剛毅、文久元年容堂公の扈從となり、翌年長藩士の横濱洋館焼討事件に關し長藩士周布政之助の暴言、容堂公を辱かしめしを憤慨して長州世子をして陳謝せしむ。其の義氣の旺なる斯の如し。同三年五十人組の暴舉を誡めて益々其の剛膽を認められ、大監察兼軍事御用役に拔擢せられしが幾くもなく之を辭す。然るに元治元年、瑞山等の大獄に當り再び大監察に任じ、野根山義舉の清岡道之助以下廿三士を奈半利川畔に處刑す。慶應二年、後藤象二郎と共に容堂公の命を受けで島津久光に使し、翌三年、容堂公に從ひて上京。切りに討幕の事を策す。明治元年大監察仕置役として藩兵を率ひて松山城を降し、同年三月官軍總督御用係として、關東に進發、四月三條公の關東大監察として東下せらるゝや、唯八官軍諸道大軍監に任ぜられて隨行し、大村益次郎を助けて彰義隊を討ち軍功あり。更に五月東北に出征し、八月廿七日會津攻撃に當り、甚句を歌ひつゝ砲車を曳き勇躍進軍中不幸流彈の爲に墜る。行年四十歳、會津融通寺に葬り後遺髪を高知久万山に埋む。此の役、次弟謙吉、末弟茂延共に從軍し同日謙吉亦戰死す。

男兒果兒一死決華物
 華祝地宇風塵難路
 岐妖消去鏡其在教差
 然既振君息源記必
 將 另別一首 同持別記

二十三、間崎滄浪

天保五年種崎町に生る。通稱は哲馬。滄浪と號す。幼時神童の名あり。資性豪放磊落落酒を好む。六歳にし箕浦居南に師事し經學詩文を學ぶ。嘉永二年十六歳江戸に上りて安積長齋に入門し熟頭となる。十七歳にして「騰起望富岳」

の一詩あり。以て非凡の詩才を知るべし。三年の後歸國して塾を江ノ口小川淵に開き盛に大義名分を説く。子弟の來り學ぶ者講座に滿ち名聲噴々として老儒を凌ぐものあり。一時須崎浦奉行となり。後文武下役を拜命せしも冤を受けて格祿を免ぜらる。而も恬然自若、再び子弟を教ゆ。夙に瑞山と意氣相投じ文久元年其の勤王血盟に参加し江戸に上りて諸藩の志士と訂交す。幕臣山岡鐵太郎切りに其の才學を推賞し、土藩をして官僕一人を附け其の自炊の勞を助けしむといふ。文久二年容堂公の密書を受け歸藩して藩政を改革せんとす。然るに俗論の爲、改革の實を揚ぐるを得ざるべきを慮り潜に栗田宮の手書を賜はりたること發覺せし爲に罪を得て收二郎と共に死を賜ふ。年三十歳。久万山に葬る。絶命の詩あり。以て其の誠忠を知るべし。

丈夫 今日死 何悲 略見 聖朝 復舊 儀
 一事 猶餘 千歲 恨 京畿 未樹 拍章 旗

明治二十四年從四位を賜はる。

二十四、細川潤次郎

天保五年二月二日、城南南新町に生る。父延平清齋

度之憂 細川潤次郎 喜志 亦同
 子之不遂 泣下 不 敢 悲 喜 亦 亦 亦
 長日 潤次郎 十九 為 十 州

儒を以て藩に仕ふ。潤次郎幼より聰明奇童の名あり。安政中、蘭學を修めて九州諸國を歴遊し諸大家に就て學ぶ所多し。後、藩名によりて上京し中濱萬次郎に就て英語を學ぶ。歸藩後、吉田參政の下に藩の制度改正御用を勤め、文久三年文武館教授に擧げられ、自宅に於ても學を多數の子弟に講ず。岩村高俊、石田英吉、後藤象二郎等門下偉才多し。土佐航路は實に當時既に潤次郎が上海號の船長として開きたるに始まるものなり。明治元年に及び、上京して議事體裁取調御用並に學校取調御用、學校權判事に歴任し或は開成學校の創立、新聞紙條例出版條例の制定等明治新政に献替する所多し。其の後累進して印刷局長、司法大輔、貴族院議員、女子高等師範學校長、樞密顧問官等の顯職に任じ、又華族女學校長、東宮太夫をも兼ね或は議定官、宗秩寮審議官たり。明治三十三年一月六日勳功により男爵を授けられ四十二年文學博士の學位を得、大正十二年七月從一位に叙せられしが同月終に薨す。年九十。

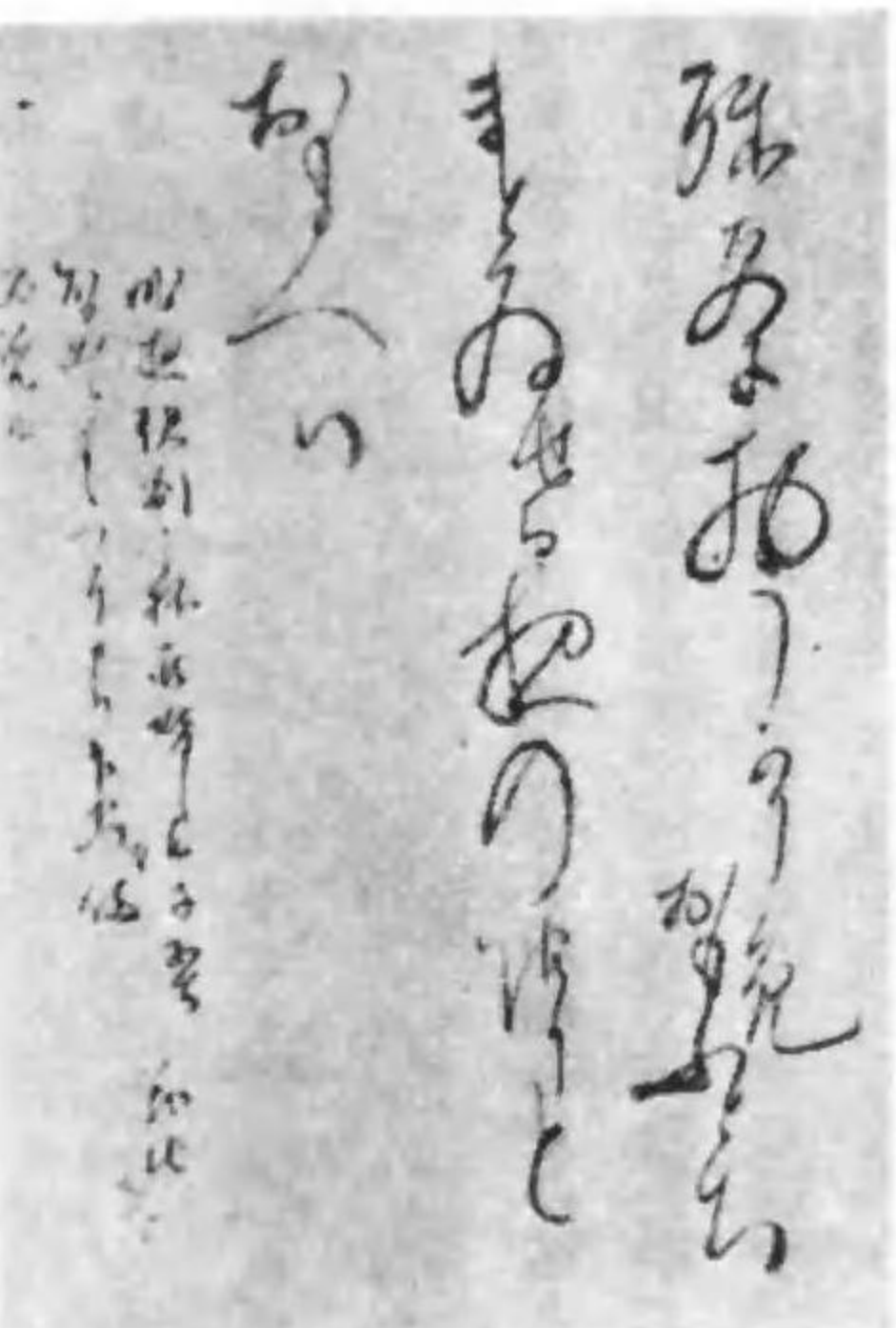
二十五、岩崎彌太郎

名は寛、東山と號す。天保五年十二月、安藝郡井ノ口村に生る。年七歳學に志してより才氣秀逸、詩をよくし夙に奇童と稱せらる。初め小牧米山に學び後岡本寧浦の門に入りて經史を學び、安政元年江戸に上りて安積良齋



に入門す。翌年父の郡衙に拘禁せられたるを聞いて急遽歸國し、父の冤罪を訴ふと雖許されず、憤慨の餘反つて自ら亦罪を得て、居村追放に處せられ城下に出で、近郊鳴田村に寓す。偶々吉田參政亦長濱村に謫居せられて學を鶴田塾に講ずるあり。彌太郎乃ち是れに師事し後藤象次郎、福岡孝弟等と交はる。東洋許されて再び參政たるや彌太郎免罪に遭ひ、藩命を受けて長崎に赴き外國の形勢を窺知して雄心切りに躍動す。慶應二年開成館に出仕し翌年再び長崎に到りて海外通商の事を監し、外船の購入に當る。後大阪留守居役となり、外交會計の事に任ず。廢藩置縣に至り藩有汽船全部の讓渡を受けて三ツ川商會を興し自ら海運業を開くや克く時運に適ひて利する所頗る多く吾國海運界の先鞭として斯界に寄與する所多し。三ツ川商會は現在の三菱商會の濫觴なり。明治七年本店を東京に移し、征台並に西南役に際しては御用船の命を受けて軍事運送に任し、其の間明治八年帝國郵便汽船會社を合併して社勢大に發展せしが、更に或は外人經營の航路を壓倒し或は官營共同運轉會社と競争して是を併合する等嶄然斯界の權威となる。尙彌太郎卒去の直後に及び日本郵船會社の成立を見るに至れり。

彌太郎資性豪邁明敏よく時運を洞察し勇往敢爲萬難に屈せず奮闘努力十餘年終に吾が國經濟界の第一人者となり三菱王國の祖業を完成す。寔に偉なりといふべし。明治十八年二月六日從五位に叙せられ、翌日東京に卒す。年五十二歳。



二六、平井 收 二郎

隈山と號す。天保六年土佐郡井ノ口村に生る。人となり英邁淵達幼時より儒學と武術を學び、文學を齋藤拙堂に學ぶ。文久三年廿七歲瑞山の勤王同盟に參す、藩主に扈從して江戸に上り、他藩士の間奔走し名聲高く雲上に迄震ひ、其の一言一行は當時天下の公議を左右するに足るものあり。然るに文久三年、間崎滄浪、弘瀬健太兩人に賜へる粟田宮の手書に關し罪を得

て歸國を命ぜられ、五月二十三日下國するや越えて六月八日終に切腹を仰付けられ、年廿九歳を以て義節に値る。墓は井ノ口村丹中山にあり。明治二十四年從四位を賜ふ。

二七、坂本 龍馬



して世論囂々鼎の沸くが如し。龍馬雄心勃勃々として禁ぜず、廣く天下の志士に交り、勤王の志愈々旺なり。文久元年瑞山の勤王血盟に加はり、其の先鋒として東奔西走大義を唱へ勤王討幕の事を謀る。文久二年四月八日、東洋暗殺せらるゝに先んじ三月二十四日脱藩し、九州中國を経て八月江戸に下り、勝海舟の門に入り海軍術を學ぶ。是蓋し吾が國情と宇内の形勢を察して將來志を海洋に成さんとしたる非凡の達見に因るものなり。元治元年八月幕府征長の軍を起すや、薩長の諸傑の間に奔走し兩藩連衡の必要を力説し、慶應二年正月廿二日遂に木戸孝允、西郷吉之助と薩長同盟六ヶ條を盟約し且つ討幕の事を内議す。然るに翌廿三日伏見寺田屋に於て幕府新選組の襲撃を受けしも身を以て難を免れ、中岡慎太郎と共に九州に遊ぶ。幕府再度の征長に當りては櫻島丸に乗じて大に幕軍を敗り。翌年四月海援隊を組織して其の隊長となる。頃年討幕の氣勢は薩長兩藩を中心として大に揚り形勢特に切迫するに到る。龍馬此の間にありて東奔西走身を忘れて國事に渴せしが、彼の大政奉還勸告の事たる抑々後藤象次郎の畫策なりと雖素是れ龍馬の建言たる維新の八大策に因る所なりといふ。以てその卓見を知るへし。同年十月十四日將軍終に大政奉還を天朝に請ひ、翌日勅許あり、維新の大業將に黎明を告げ、新政の經綸愈多事なるに際して十一月十五日、京都河原町近江屋に於て同志の士陸援隊長中岡慎太郎と會談中突如兩人共に幕府方の刺客の兇刃に墮る。時に龍馬年三

十三歳兩雄の威靈千秋の恨を残して永く洛東靈山に眠る。明治二十四年贈るに正四位を以てせられ京都東山と桂濱の巖頭の銅像は不朽の偉勳と英風を傳ふ。



二十八、中岡慎太郎

天保九年安藝郡北川村床屋小傳次の長男に生る。龍馬に後ること三年なり。質性豪膽智才非凡なり。嘉永五年間崎滄浪の門に入りて經史を學び傍ら劍道を修む。翌年米艦渡來して天下の物情頗る騒然たり。安政の頃より武市瑞山に就て劍道を學び、志士と交はり更に更に江戸に上りて桃井塾に入る。翌年歸國して切りに國事を憂へ、文久元年土佐勤王同盟を結成し瑞山を首領として龍馬と共に其の中堅たり然るに藩論區々にして志を藩内に得ず、已にして脱藩して長州に走る。元治元年九門の戦起るや、長州軍に参加して身傷づく。藩長連合の成るに至れる坂本龍馬と共にその努力奔走の功多きに居る。坂本龍馬の海援隊を組織するや自ら陸援隊を組織して其の隊長となり相並びて一朝の急に備へ大に爲す所あらんとす。蓋し當時天下の先鞭たり。然るに慶應三年十一月十五日新政に對する滿腔の經論を抱きて龍馬と共に相擁して刺客の兇人に傷き越へて十七日終に絶命す。時に年三十。龍馬と共に洛東靈山に葬る。明治廿四年正四位を贈らる。室戸岬頭の銅像は桂濱巖頭坂本龍馬の銅像と東西相並びて永く後進を感奮興起せしむるものあり。中岡、坂本兩雄夙に訂交最も深く、其の偉器互に兄たり難く弟たり難し。常に相携へて國事を謀り終に相抱いて王事に殉す。寔に土佐勤王志士の双壁たり。



二十九、谷干城

天保八年二月十一日高岡郡窪川村に生る。人となり、剛直廉潔にして熱情燃ゆるが如し。硬學谷秦山五世の孫にして、弘化三年、年十一歳高知に轉住し、弓術と砲術とを學び、十六歳にして武藝を以て御目見仰付けらる。二十歳藩命によりて江戸に上り軍學及び漢書を若山勿堂に、儒學を安積長齋、塩谷宕陰に就きて修む。文久元年武市瑞山の尊攘論に賛同し、更に坂本龍馬、後藤象次郎等と相交はる。慶應二年藩命を以て上海に渡航し、親しく海外の情勢を視察し得る所あり。翌年小目附となり、此年四月容堂公に扈從して上京し、六月小松帶刀、西郷隆盛、乾退助、中岡慎太郎等と薩長の連盟討幕を密議する所あり。戊申役に當りては單騎土佐に下りて、討幕の出兵を促し、爲に一藩の士氣大に振ふ。奥羽征討の大軍監として戦功あり。明治六年吾が國徴兵令の發布を見るに至れるは抑干城年來の主張たりし、四民皆兵の意見に負ふ所尠からず。明治七年台灣征討の參軍として武名を馳せ、西南の役、熊本鎮台司令官として籠城五十餘日、薩軍二萬の包圍に拮抗し、力戰奮闘孤城を死守して聊かも屈せず、克く官軍の大勢を支持せしは著明の偉功にして、四民皆兵の實力を示したるものなり。籠城中一詩あり

春入遠郊未入城 砲燗日々四邊橫
屠虜々盡又烹馬 不屈三千一致兵

明治十一年陸軍中將に進み、十三年陸軍士官學校長兼陸軍戸山學校長に任ぜられしが翌年官を辭し、國憲創立議會開設を政府に建白する所あり。十七年再び出でて學習院長となり子爵を授けられ、更に翌年農商務大臣となる。十九年命を受けて歐米を漫遊し歸朝後切に當時歐化の風を慨して時弊匡正策を政府に建議す。同年七月條約改正に反對して官を辭し、明治二十二年、

新保守黨を起して日本主義を提唱す。明治二十三年貴族院議員となり、侃諤の論を以て院の内外に重きをなし屢々國政に關して建言若しくは意見書を發表する等憂國の至情默止する能はず。實に忠君愛國の精神と國粹主義を堅持して終始一貫せしは稀に見る所なり。明治四十四年四月特旨を以て正二位に叙せられ、五月十三日、年七十五才を以て薨じ遺骸を久万山に葬る。



三十、坂垣退助

名は正形、無形と號す。天保八年城下中島町（今の高野寺の地）に生る。幼にして不羈放縱、荒事論争を好む。十五才にして盛組の巨類となり豪名を馳す。安政三年二十才、事を以て同輩を辱かしめ、神田村に謫居を命ぜらるゝや吉田東洋の慰諭を受けて大に悟る所あり、安政六年赦されて家に歸り頻りに文武に勵む。万延元年拔擢せられて免奉行となり、文久元年江戸藩邸會計兼軍備御用に任せられ、翌年容堂公の測用人となり江戸藩吏總裁の職に累進す。文久三年歸國後、藩論一變し佐幕に傾くや、職を罷められ下士勤王の領袖中岡慎太郎と肝膽相照す。同年九月再び起用せられて後藤象次郎と共に藩政に當り慶應元年東上して官務の傍ら文武を學び、三年京都に上り中岡慎太郎、谷干城等と共に藩士小松、西郷、吉井等と相會して一死討幕の事を約す。蓋し維新秘話中の特筆事たり。退助歸藩後幾くもなく明治元年伏見の變あり。藩議討幕に決するや、退助藩兵一千を率いて京師に上り、江戸及び會津征伐に戦功あり。凱旋後天顔を拜して太刀天盃を賜ふ。明治二年參與に、翌年高知藩大參事に任じ、四年太政官の參議に任せらる。明治六年征韓論の敗るゝや野に下りて翌年後藤象次郎副島種臣等と民選議院設立の建言をなし又同志と共に愛國公黨を組織す。明治八年再び出で、參議に任せられしも幾くもなく之れを辭し、高知縣下に立志社を設立して大に自由民權の思想を天下に鼓吹す。明治十年國會開設の上書を奉呈して容れられず、同十四年自由黨を組織するや有志糾然として之に參し、退助總理となり、民

權自由の聲天下に高揚す。十五年岐阜中教院に於て相原尙裘の爲に刺さるゝや泰然自若、「坂垣死すとも自由は死せず」と、傷癒えて後藤象次郎と共に渡歐し滯留三年具さに彼地の文物制度を視察し、歸朝後勳功によりて華族に列せられ、伯爵を授けられしが、上書固辭するも終に許されず。明治三十一年、大隈重信と共に大命を奉じて所謂隈板内閣を組織して内務大臣に任せられしも政見相合はずして斷然野に下り爾來政界を退くに至る。晚年社會事業に盡瘁して寧日なし。大正八年七月十六日終に薨す。年八十二才。此日從一位に叙せらる。退助寡欲恬淡清貧に甘んじ、夙に一代華族論を主張す。其の創設せる自由黨は後改組して現在の政友會たり。蓋、伯は明治政黨の巨頭、憲政の元勳なりと言ふべく、高知公園、東京芝公園、岐阜、日光に銅像あり。永く伯の偉勳と高風を傳ふ、伯の誕生地、市内高野寺内に坂垣會館あり。

三十一、吉村寅太郎

倭樹在國揚張揚汝心呼
大濤修宵一糸一風為
忠厚在在好此水也

諱は重郷、天保九年高岡郡東津野村芳生野に生る。資性豪邁不羈、年十二歳にして父の職を繼ぎて芳生野の里正となり後各地に轉じて到る所治績あり。以て其の非凡なるを知るべし。夙に間崎滄浪に學びて勤王の志彌々篤し。文久元年土佐勤王同盟に参加し、翌二年防長より九州の間を歴遊して志士と訂交す。やがて筑前の士平野二郎等と共に義兵を擧げんことを企て歸藩して武市瑞山を懲惡せしも同意を得ず。乃ち同志と約して脱して長州に奔り、次で更に大阪に上る。四月島津久光入京するや討幕の氣勢大に揚る。茲に於て百方同志を語らひて戦備に汲々たり。然るに四月二十三日淀川を遡りて入京せんとし同夜伏見寺田屋の變ありて事忽ち破れ、終に同志宮地宜藏と共に禁獄せらるゝこと八ヶ月、同年十二月に至りて赦免せらる。當時攘夷の論愈々旺にして、風雲益々急を告ぐ。かくて雄心勃々禁する能はず。翌文久三年再び入京せしが三月十一日、天皇御親ら加茂に行幸し給ひて攘夷を祈願し給ふや、勤王の士氣實

に冲天の概あり。討幕攘夷の舉亦將に一觸即發の情勢を示せり。時恰も五月老父危篤の急報に接し訃音次で到る。寅太郎哀愁洵に切なりと雖大義の重き終に顧るの迫なし。是れより一度長州に下り再度京都に還りて、或は桂小五郎等の志士と謀り、或は三條、中山等の諸卿に説き遂に八月天皇大和に行幸し給ひて神武天皇の御陵、春日社に參拜せられ攘夷親征の軍議を催さるゝことを布告せらるゝに至る。茲に於て寅太郎等時到れりとなし勇躍奮起して討幕の先驅をなさんとし、松本奎堂、藤本鐵石等と相謀り侍從中山忠光卿を奉じて義兵を大和に擧ぐるや、同志の士來り投ずるもの多く士氣大に振ふ。然る十八日朝議遽かに一變して事志と違ふ。然れども敢て初志を屈せず、斃れて後已まん事を期し、寅太郎自ら大和十津川に義兵一千を募りて高取城を攻むるや不幸流彈に傷くに至る。既にして幕軍の包圍に陥り同士次第に死傷離散して士氣日に衰へ、九月二十六日鷲家口に奮戦終に悲壯の最後を遂ぐ。時に年二十有六歳。明治元年首を洛西の刑場に探りて是れを洛東靈山に改葬す。明治十四年靖國神社に合祀せられ、明治二十四年正四位を贈らる。南山義舉に加はれるもの、中土州勤王の士最も多く吉村寅太郎の外左記十六人を數ふ。

那 須 信 吾

高岡郡佐川に生れ、禰原村那須家に養はる。田中光顯翁は其の甥なり。吉田參政を暗殺して脱藩し後在京國事に奔走す。大和義舉に加はり、九月廿四日鷲家口に戦死す。年三十五、明治二十四年四月十一日從四位を追贈せらる。

前 田 繁 馬

高岡郡松原村に生る、文久三年七月京都に上り、やがて義舉に加はりて各地に轉戦し九月廿四日鷲家口に激戦し敵の重圍を脱して初瀬町に逃れしが津藩の兵來り襲ふに及びて遂に郡山に戦死す。年廿五歳。明治三十一年從五位を追贈せらる。

鍋 島 米 之 助

潮江村の人なり。文久の頃、脱藩して上國にありて國事に勞す。大和義舉に加はり鷲家口に戦死す。年二十四歳、明治三十一年正五位を贈らる。

森 下 儀 之 助

長岡郡本山村に生れ、後秦泉寺に住す。夙に勤王の志厚く、志士に交はり國事に奔走す。文久三年京に上り、やがて大和の義舉に参加す。九月九日下市の夜襲に勝利を得たりしも越へて廿四日鷲家口に敗れ翌日捕へられて翌年二月十六日京都に斬殺せらる。年三十六歳。

森 下 幾 馬

儀之助の弟なり。文久二年五十人組に列して江戸に上り、後容堂公に従ひて京都に上り次で義舉に加はる。九月廿六日軍敗れて天辻の本陣に退き廿七日カネハシに戦死す。年三十。明治三十一年正五位を贈らる。

楠 目 清 馬

瀬江村の人なり。文久の頃脱藩して京都に上り、志士と交はる。九月二十四日鷲家口の戦に重圍を脱せしが翌日和州に鬪死す。年二十二歳。明治三十一年正五位を贈らる。

安 岡 嘉 助

香美郡山北村の人。小壯文武を修め後瑞山の勤王血盟に参加す。文久二年四月吉田元吉を暗殺して長州に奔り、次で京都に上りて長州又は薩摩屋敷に潜伏す。翌年大和義舉に當り九月七下市の戦に傷き廿四日鷲家口の戦を経て翌日捕へられ、翌年二月十六日同士と共に洛西に斬らる。明治二十四年從四位を追贈せらる。

田所 騰次郎

潮江村の出なり。夙に勤王の志あり。文久元年脱藩して京都に上る。南山の義舉に當り九月七日下市に大勝を得たりしが廿四日鷺家口に敗れて捕へられ、元治元年二月十六日京都に斬らる。年二十四、明治三十一年正五位を贈らる。

土居 佐之助

高知城下北新町土居彌十郎の養子なり。幼より文武を學び武市瑞山の勤王同盟に加はる。文久三年脱藩して京都に上り、或は長州に下りて高杉晋作、久坂玄瑞等と義舉を策す。南山の義舉に當りては九月二十四日最後の血戦を経て廿八日捕へられ、翌年二月十六日同士と共に京都に斬らる。年二十四歳、明治三十一年正五位を贈らる。

安岡 斧太郎

安藝郡安田町に生る。少壯にして砲術、劍道を學び後土佐勤王同盟に血盟す。文久二年土佐五十人組に加はりて江戸に上り、次で容堂公に従ひて京都に上る。後、勝海舟に海軍術を學び、翌三年北海道の地理を探究す。同年大和義舉に参加して九月二十四日鷺家口に傷き、捕へられて翌年洛西に斬らる。年二十七歳。明治三十一年正五位を贈らる。

澤村 幸吉

潮江村の人。鷺家口の戦に圍を破りて出でしが後捕へられて翌年洛西に斬らる。年二十二、明治三十一年正五位を贈らる。

島村 省吾

安藝郡羽根村の人、鷺家口の戦の後捕へられて翌年洛西に斬らる年二十、贈位せらるゝこと前の如し。

上田 宗兒

高知城下上町に生る。土佐勤王同盟に参加し、文久二年藩脱す。南山の義舉に當りては先づ大和五條の代官鈴木源内を捕へ、或は高野山に義兵を募る。戦敗るゝや忠光卿を奉じて重圍を脱し長州に走る。再度の征長に際しては長軍に屬して奮戦殊功あり。次で明治元年伏見の役長軍に加はりしが遂に流弾に墜る。年二十七、明治三十五年正五位を追贈せらる。

島 並馬

吾川郡長濱村の人なり。文久中上京して三條實美卿の衛士となり義舉に加はりて五十騎に將として勢州の陣を破り九月十四日同士と訣れ中山侍従を擁し周防に奔る。慶應元年二月伯耆より京に上らんとし作州土居關所に到る。關吏拒きて通さず。竟に番卒の困む所となり、同志井原應助と耦刺して死す。年二十三、明治三十一年正五位を贈らる。

池内 藏太

城北小高坂村の人。少壯江戸に遊學して志士に交はり、やがて土佐勤王同盟に加擔す。文久三年長州に到り、同年五月佛艦の砲撃に功あり。大和義舉に加はりて洋銃隊長となり各地に奮戦せしが戦敗るゝや敵の重圍を脱して周防に奔る。元治元年九門の戦に参加し、後坂本龍馬の海援隊に屬して活躍中同年五月二日長崎航行中暴風に遭難して溺死す。年二十六、明治三十一年從四位を贈らる。

伊吹 周吉 (後の石田英吉)

安藝郡中山村に生る。文久三年上京し初めて寅太郎と相識り、義舉に際しては九死に一生を得て脱出し九州に奔る。後長州軍に屬して征長の募軍と戦ひ、又九門の變に参加し、已にして海援隊に入る。明治新政に及びて長州小判事より秋田、長崎、千葉、高知の各縣知事に歴任し、明治二十三年、農商務大臣となり、又貴族院議員に勅選せられ、明治二十九年男爵を賜はる。

同三十四年八月八日卒す。年六十三。



二十二、後藤象次郎

象次郎幼にして父を喪ひ、姉婿吉田東洋に扶育せられ學を鶴田塾に受く。安政六年幡多郡奉行となり次で近習目附、普譜奉行に歴任し、文久二年吉田参政の暗殺せらるゝや致仕して英蘭學を修む。後藩論一變して大監察に任せられ端山一派の斷獄に當る。慶應三年、當時天下の形勢を洞察し坂本龍馬の建策を容れ容堂公に勸めて大政奉還を將軍に建白するに至らしめ、自ら其の使命を帯びて將軍に謁し終に是れを實現したるは維新史上に特筆すべき益世の偉功と言ふべし。維新後新政府の參議に任じ太政官左院議長たり。明治六年征韓論に敗れて板垣退助等と共に官を辭し、野に下りて、民選議院の設立を建白す。明治十年板垣退助と共に渡歐し文物制度を視察すること三年、明治十九年功によりて伯爵を授けらる。同年より憲政樹立の必要を遊説し、二十年大同團結の一大政黨を組織して自ら其の黨首たり。越へて廿二年入閣して選信、農商の兩大臣に歴任し二十七年に至りて辭職せしが三十年八月三日六十才を以て東京高輪に薨す。

たけのこはたけのこをたけのこ
あはれはあはれをあはれ

三十三、佐々木高行

通稱三四郎、天保元年、長濱村に生る。幼にして具さに貧苦を嘗む。而も意を文武にいたして鹿持雅澄に就きて國學を修め、尙劍道、兵法を學ぶ。嘉永五年一度劍道修業の爲、近畿より江戸に遊び歸藩後再び江戸に上りて漢學を安井息軒に、兵學を若山勿堂に學び傍ら當時の國情を憂へて勤王の同志と訂交す。慶應二年容堂公の命により三條公を太宰府に訪ひ、翌年大監察に進む。當時坂本龍馬、後藤象次郎等と相携へて尊王攘夷の策に苦心す。慶應三年外國交渉の事を以て長崎に赴きしが時恰も戊辰に際し幕府瓦解して市中騒然たり。高行處置當を得て市民爲に安堵す。明治元年以來諸官に歴任し三年參議に、翌年司法大輔に任せられ、已にして命により歐米を視察し、歸朝して明治六年大判事に任じ、七年司法大輔となり同年七月左院議長たり十三年元老院副議長に任じ、翌年參議兼工部卿に任せられ、明治十七年伯爵を賜ふ。翌十八年宮中顧問官たり至尊の知遇殊に厚く、明治二十年、明宮御養育主任を拜命し、二十一年樞密顧問官に任じ、引續き常宮、周宮兩内親王御養育主任となり、蹇々匪躬終始よく大任を盡す。明治四十二年 八十歳にして積年の勳功により特に候爵を授けらる。翌年三月二日病篤きに及びて従一位に叙せられ其日薨す。

三十四、福岡孝弟



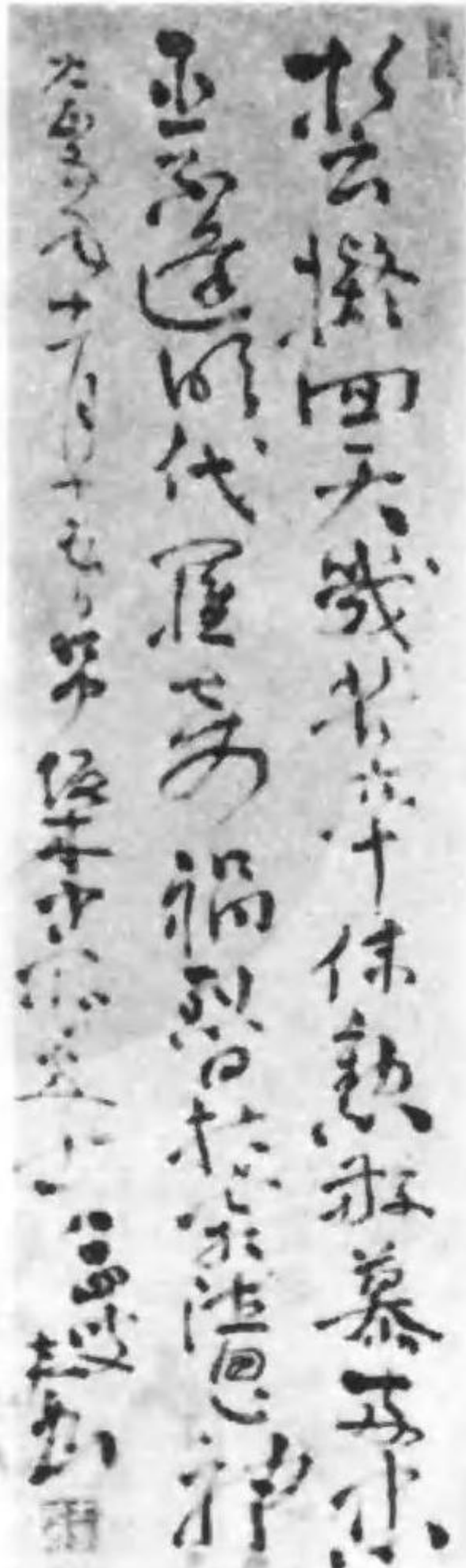
孝弟公に侍して會談を補佐す。やがて一藩勤王に決するに至れるは孝弟の極力盡瘁の功多きに居る。此年五月容堂公の上京に扈從して勤王諸藩の間に斡旋する所あり、八月大政奉還の建白をなすや、豫め將軍に内意を通じて其の採納せられんことに努む。明治新政に際しては、制度事務局判事に任じ特に五箇條の御誓文の起草に與りしは孝弟の歴史的事業と言ふべし。次で參與に任ぜられ、爾來新政府の顯職にあり。明治十四年文部卿となり、十七年子爵を授けられ後樞密顧問官を経て議定官に補せられしが大正八年三月六日薨す。年八十五才

三十五、山地元治



天保十三年、小高坂越前町に生る。幼にして一眼を失ひ、後年人呼んで獨眼龍といふ。資性豪快沈毅膽力人に優る。文久元年二十才、容堂公の御側勤となり、慶應三年歩兵小隊司令として京師に上り、伏見鳥羽の戦起るや、藩命を待たずして進軍して討幕の第一彈を發し以て勤王土藩の威名を揚ぐ。東征に際しては七番隊長胡蝶隊長として従軍して戦功あり。凱旋後大隊長に任じ馬廻格となる。西南の役に際しては別動隊第三旅團參謀長となり八代口より進撃す。後賊を人吉に攻むるに當り身傷くも屈せず。劍に杖つて突進し大に之を破る。功によりて大佐に進み爾後累進して中將に昇り男爵を授けられ、明治二十三年第一師團長に補せらる。日清戦後には攻撃一日にして旅順の要塞を陥れ勇名内外に轟く。戦後殊勳によりて勳一等旭日大綬章功三級金鷄勳章を賜ひ子爵を授けらる。伏見役後從軍數回身に十八瘡を負ふ。恩威並び行はれて部下の心服すること父の如し。後西部都督たりしが明治三十年十月二日周防三田尻に薨す。年五十六才東京青山に葬る。

三十六、土方久元



天保十三年城北秦泉寺に生る。資性謹嚴剛直忠誠最も篤し。少壯東遊して若山勿堂、藤森弘庵の門に學

ぶ。文久三年、間崎滄浪と共に上京し深く時勢の急を憂へ堂上諸郷の邸に出入し、或は諸藩士と往來して切りに國事に奔走す。二月二十四日滄浪と共に容堂公に伏見の藩邸に謁し將軍の上洛に先ち攘夷の期日を定め朝廷より公布せんことを陳述す。而も容れられず。學習院御用掛となりて京都にありしが文久三年朝議一變して七郷長州に下るや三條公を護衛して長洲招賢閣に入る。征長の幕軍來り攻むるに及び五郷を奉じて大宰府に下り薩長連合の策謀に參す。明治元年大政官議政官に任せられ、次で内務少輔内閣書記官長、宮中顧問官に歴任し、明治十七年子爵を授けらる。明治二十年七月農商務大臣に任じ九月更に宮内大臣となり爾來塞々匪躬の臣節を盡すこと十年、聖上の御信任最も厚く洵に朝家の柱石たり。功を以て更に伯爵を授けられ、退

職後正二位勳一等に叙せられ前官の禮遇を賜ひ、高齡八十に及びて宮中鳩杖を賜はる。大正七年十一月四日從一位に叙せられ其日薨す時に年八十六才。

三四



三十七、片岡健吉

天保十四年高知城下中島町に生る。資性敦厚の君子人なり。家代々山内家に仕へて馬廻格たり。文久元年十九才にして藩主豊範公の小姓となる。同三年土佐吾川長岡三郡の郡奉行となり、後香美郡奉行に轉じ専ら海防の事に當る。明治元年藩議討幕に決するや半大隊司令として進發し途中高松城を降して京師に上り更に東征の大軍監となり甲府、今市、若松に轉戦して軍功あり。歸藩後參政軍事係となり兵制を立つ。土藩之を朝廷に獻じ薩長と共に御親兵となす。是れ即ち近衛兵の前身なり。同年朝命によりて米英佛の國情兵制を視察し翌年歸朝するや海軍中佐に任ぜられしも征韓論に關して職を辭し愛國公黨の組織、立志社の創設に干與し、又民選議院設立に關して建白書を京都市在所に奉呈す。西南役に當りては林有造等舉兵の企あり。健吉亦之に坐して禁獄百日に處せらる。十二年大阪に愛國社を創設して大に民論を鼓吹し、翌年河野廣中と共に二府二十二縣八萬七千餘人の總代となり國會開設請願書を大政官に呈する等、憲政の創始に奔走盡瘁して殆んど寧日なし。然るに明治二十年言論集會出版自由權請願の爲上京中保安條例に觸れて石川島の獄に投ぜられしが二十二年憲法發布の際大赦に遭ひ。翌年本縣選出代議士となり、三十一年第十二議會より衆望を負ひて衆議院議長たり。明治三十五年京都同志社々長兼校長となり、翌年日本基督教傳道局總裁に推さる。同年病の爲に歸縣せしが病勢次第に重く十一月四日終に逝く。年六十一才秦泉寺に葬る。病中正四位勳三等に叙せらる。



三十八、山内豊範

弘化二年四月十五日、高知城中に生る。第十二代藩主豊資公の四男なり。安政六年容堂公塾居を命せらるゝや封を襲ぎて第十六代藩主となる。時恰も佐幕、討幕の兩論抗爭して物情頗る騒然たり。文久二年内勅を奉じて恐懼感激し、勤王の志士を登用して率先挺身王事に謁さんことを期し皇都に上る。同年勅使三條實美卿を護衛して東下し大臣を果して土藩勤王の名大に揚る。爾來内は舉藩一致以て時難に處せんとし、外は公武の合体に苦慮し、前藩主と共に維新回天の事業を翼賛せし勳功擧げて數ふへからず。至尊の恩遇頗る篤く、恩命恩賜等一再に止まらず。明治二年藩籍の奉還を見るに至りしは公が無私奉公の大義により薩長肥三藩と共に天下に率んじ連署して以て之を請願したるによるものにして、明治新政の實効を揚ぐるに寄興したる勳功亦偉大なりと言ふへし。其後高知藩知事を仰付けられ他藩に先んじて藩政を改革する所尠しとせず。明治四年御親兵を獻して禁闕を奉護す。是れ即後年近衛兵の前身なり。豊範公土佐藩執政十三年、維新の大業を翼賛完成してより後は敢て新政の顯職に任ずる事なく、麝香問詰として餘世を送る。明治十二年特旨を以て從三位に叙せられ、越へて十九年侯爵を授けられ從二位に叙せらる。其の薨せられしは同年七月十三日、享年四十一、潮江山に葬る。別格官幣社山内神社は第十五代藩主豊信公と共に豊範公を配社する所なり。

三十九、中江兆民



名は篤助、弘化四年城下山田町に生る。資性飄逸氣骨あり。世俗に習はず恬然として獨歩し奇行多く詩囊大にして文才一世に卓越す。風雲急なる時勢に關心せず。慶應二年十九歳長崎に赴きて佛語を學び明治四年岩倉公一行に隨ひて渡歐留學四年歸朝して外國語學校長に任せられる。この後元老院小書記官となりしも幾くもなくして野に下り佛學塾を開きて子弟を教授し旁ら政理叢談「ルソー」の民的論譯述を刊行して佛國派自由民主論を主張し尙二十一年大阪に東雲新聞を發行して當時の政界に活氣を興へ大に自由平等の思想を鼓吹す。明治二十三年一度大阪府選出代議士たりしも政界の俗臭を嫌忌して辭職し晚年北海道製紙業經營に従事せしも不幸失敗に歸す。三十三年喉頭痛に冒され翌年十二月十三日卒す。年五十五、青山墓地に葬る。病性不治餘命一年半を出でざるを知るや、病床中「一年有半」を草し次で又「續一年有半」を脱稿す。蓋奇論卓說哲理に徹するもの、讀者争ひ求めて東都の紙價爲に騰る。

四十、箕浦元章

通稱猪之吉、佛山と號す。家代々儒家にして扈從格たり。弘化元年湖江村（現上町）に生る。幼より才氣秀穎、書を読み詩文を能くす。万延元年十七歳容堂公に品川藩邸に侍讀し後歸藩して致道館助教たり。後又老公に扈從すること數年、馬廻格となる。慶應三年歩兵隊長として上京、明治元年泉州堺の警備に任ず。此年十二月十五日佛國水兵廿餘人堺に上陸して社寺人家

を掠奪し吾が隊旗を奪ひて狼籍到らざるなし。元章等憤慨し追ひて之を銃撃し佛兵十一名を斃す。佛公使朝廷に嚴談し爲に元章等二十三日堺妙國寺に於て死を賜ふ。元章以下順次壯烈なる最後を遂ぐるもの十一人、佛吏恐れて逃去り殘刑者を宥されんことを乞ひ、九人爲に死を免る。十一士の遺骸は之を妙國寺の隣なる寶珠院に葬る。元章時に年廿五歳、刑に臨むや威風凜凜、佛人を睨み腹十文字に切りて臟腑を掴み出し將に佛人に投付けんとするが如し。介錯人首を討つも斷たず、元章從容として介錯人に向つて曰く「靜かに〜」と、佛人其沈勇に驚嘆す。

辭世の詩に曰く

除却洋氛答國恩 決然豈可省人言

只令大義傳千歲 一死元來不足論

殉節者左の如し。

西村氏同	二十四歳	池上光則	三十八歳
大石良信	三十八歳	杉本義長	三十四歳
勝賀瀬迅	二十八歳	山本利雄	二十八歳
森本重政	三十九歳	北代堅勝	三十六歳
稻田楯成	二十八歳	柳瀬義好	二十六歳

四十一、馬場辰猪

嘉永三年城下金子橋に生る。明治初年上京して福澤諭吉の慶應義塾に英語を學び、明治三年藩命によりて英國に留學し語學の外、政治經濟を修め在英十年にして歸朝す。明治十四年板垣伯の自由黨結成に當り入りて其副議長たりしが議合はずして脱黨

し自ら英國式平民主義を提唱して大に社會人心の覺醒に力め又東京に明治義塾を創立して子弟を教育す。明治十八年米國に航し各地を遊歴して日本文化を紹介し國情を通じ以て吾國外交上に貢獻する所尠からず。明治二十一年十一月三日米國フィラデルヒヤに客死す。年三十九歳。

三八



四十二、島村速男

安政五年小高坂西町に生る。幼にして藩校致道館に學び後陶治學校を経て海南學校より海軍兵學校に入る。明治十三年海軍少尉に任官し十八年英國に留學す。明治廿七年海軍大尉として日清戰爭に従軍し黄海の海戰、威海衛の攻撃に殊勳を立つ。卅七年海軍少將第二艦隊司令官として旗艦磐手に坐乘し日本海々戰に當りては參謀長として對島海峽迎撃を策戦し終始東郷長官を輔佐して偉勳を立て名參謀の盛名を揚ぐ。明治四十三年英國皇帝戴冠式に際して帝國練習艦隊司令官として艦隊分列式に參列し後海軍兵學校長、海軍大學校長、第二艦隊司令官、佐世保鎮守府司令長官に歴任し次で大將に昇進して海軍々令部長の要職に就き帝國海軍の樞軸を握る。大正三年歐洲大戰に當り吾海軍の太平洋、印度洋、地中海に於ける偉勳は概ね其の籌劃鬼策に出づるものにして功により男爵を授けらる。大正十二年三月八日年六十六歳を以て薨じ正二位に叙し元帥號を賜ふ。



四十三、大町桂月

明治二年一月二十四日高知市北門筋に生る。資性磊落飄逸文材あり。明治十三年十二歳東上し十九年第一高等學校に入り二十九年東京帝國大學文科を卒業す。爾來生涯文章を以て終始し文名噴々として桂月全集其他著述百餘種あり。大正十四年青森縣十和田湖畔の温泉に客死す。年五十七歳。桂濱は其の愛慕の地にして號桂月は此處に因む所。桂濱には記念の碑あり。

四十四、濱口雄幸



明治三年四月一日長岡郡五臺山村唐谷に生る。資性謹嚴重厚質實公正を以て聞ゆ。舊姓水口後安藝郡田野村郷士濱口家を嗣ぐ。明治廿四年東京帝國大學法科政治科卒業後大藏省に入り爾來山形收稅署長、大藏省書記官、各地稅務官に歴任し累進して明治四十年專賣局長より越へて同局長に任す。大正二年には遞信次官、翌年大藏次官たり。大正四年三月高知縣第一區より選出せられて代議士となり爾來當選すること四回、大正十三年大藏大臣、十五年內務大臣となり更に昭和二年衆議を負責て

三九

立憲民政黨總裁たり。昭和四年七月組閣の天命を拜して濱口内閣を組織するや多事多難の時局に當り獻替大に力め殊に經濟國難の打開に肝膽を砕く。然るに翌五年十一月十四日東京驛頭に於て不幸兇漢に狙撃せられ翌年四月爲に官を辭せしが八月二十六日終に薨す。享年六十二歳、青山墓地に葬る。

目次

順次	目次裏	事項	頁
一	高知コース		
二	四國交通圖		
三	高知市附近略圖		
四	高知市内略圖		
五	高知市の名勝		一、二
六	高知公園		
七	昔の高知城圖		
八	浦戸灣一帯の名勝		三、四、五、六
九	種崎、桂濱、長濱方面の名勝		七、八、九
一〇	浦戸灣沿岸一帯の案内圖		一〇
一一	龍河洞方面の名勝		
一二	室戸岬方面の名勝		一一、一二、一三、一四
一三	高知市以西の名勝		一五、一六、一七、一八
一四	土讚沿線の名勝		一九、二〇
一五	土讚沿線略圖		二一
一六	土佐名物		二二
一七	土佐土産品及び土佐民謡		二三
一八			二四

高知行ス

甲、阪神ヨリ

- 1、海路……土佐商船株式會社定期船
 大阪天保山棧橋發 午後五、三〇
 神戸中央棧橋發 同 八、三〇
 高知棧橋着 翌午前八、〇〇
 乗船賃三等三、六〇 二等二、三〇 一等一、〇、八〇
 日曜祝祭日 未明室戸寄港
 高知棧橋發 毎日午後五、〇〇

2、陸一路……

- (イ)宇野、高松經由連絡 三等四、八〇
 大阪驛發 前八、〇〇 前四、〇〇 後一、五〇
 岡山驛發 前二、〇〇 前二、〇〇 後四、三〇
 高松驛發 後五、三〇 後五、三〇 後九、三〇
 高知驛着 後五、三〇 後九、三〇 後一、五〇
- (ロ)小松島、池田經由連絡 三等三、八六
 大阪天保山發 午後九、四〇
 小松島驛發 午前五、〇四
 高知驛着 午前二、〇、二四
- (ハ)攝陽汽船、阿波共同汽船合同航路
 大阪發 午後一〇、〇〇
 徳島驛發 午前五、二七
 高知驛着 午前一〇、二四

3、航空路(二〇圓)

- 大阪木津川發 前〇、四〇 小松島着 前二、三〇
 小松島發 前二、三〇 高知西孕着 後〇、三〇
 歸船發 後一、三〇

乙、中國方面ヨリ

- 1、尾ノ道、多度津經由
 尾ノ道發 前五、三〇 前一〇、三〇
 多度津着 前九、三〇 後一、四〇
 多度津發 前二、三〇 後二、三〇
 高知驛着 後二、四〇 後五、三〇

2、宇品、高濱經由

- 宇品發 前八、三〇
 吉浦發 前九、一〇
 高濱着 前一、五〇

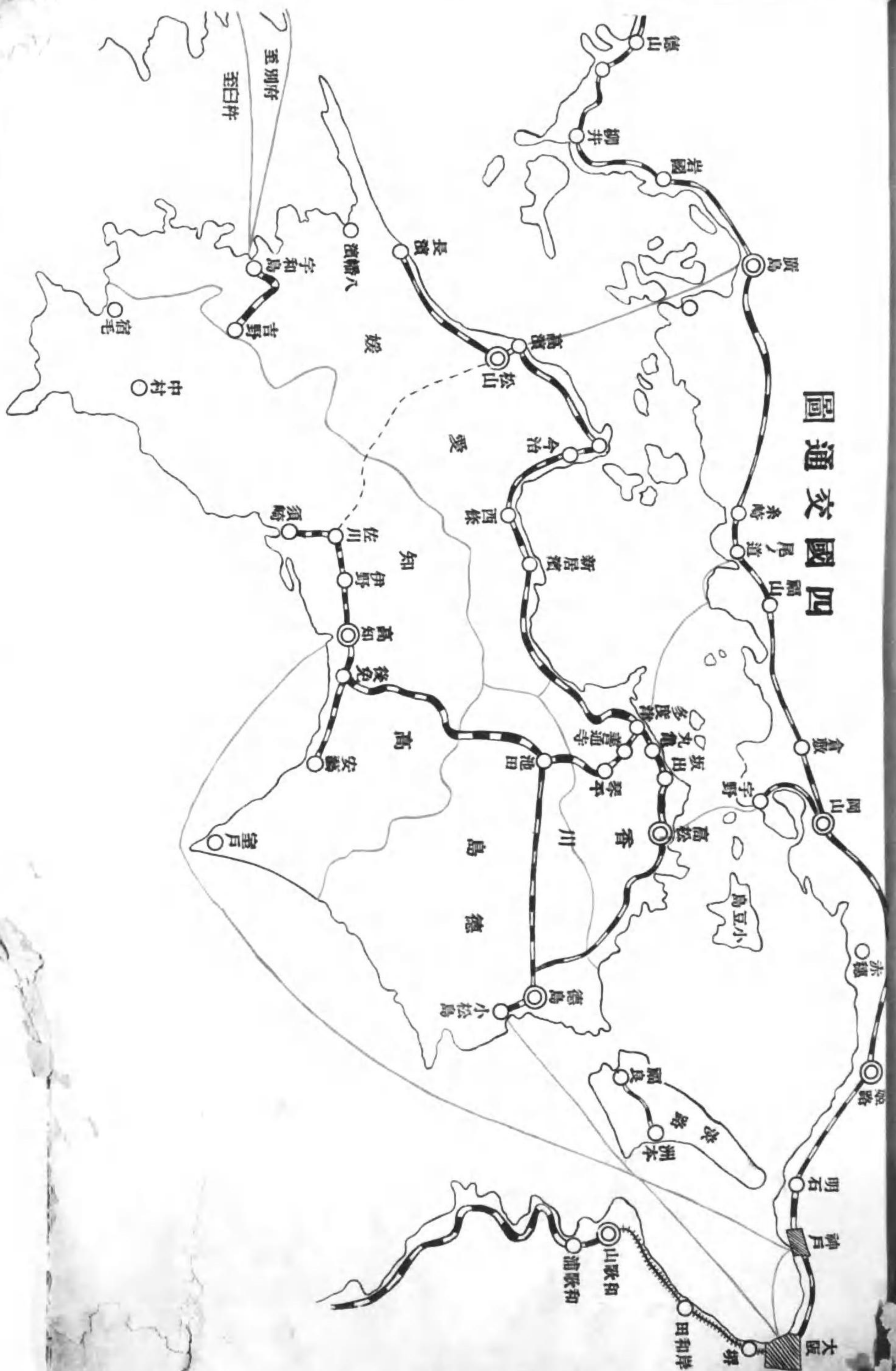
電車

- 松山發 後一、二五

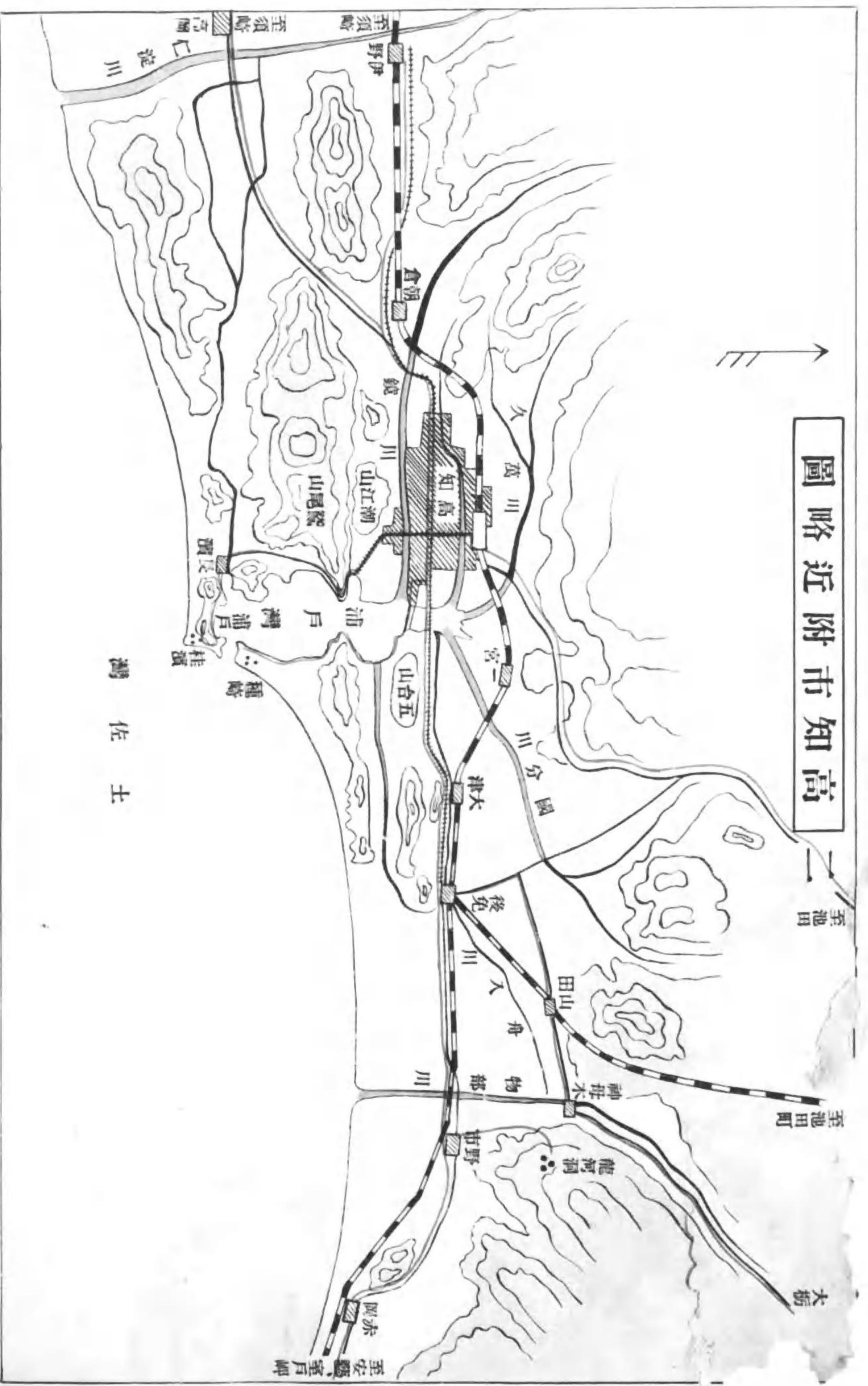
省營バス

- 佐川着 後六、二〇
 佐川發(汽車)後七、四一
 高知驛着 後八、二四

四國交通圖



高知市附近略圖



土佐佐灣



四、高知市の名勝 其の一

下右 大高坂神社

下左 縣社天滿宮



高知公園

(國寶高知城)

吉野朝時代大高坂松王丸此處ニ據リテ義旗ヲ掲ゲ潮江山ニ據リ給ヒシ花園宮滿良親王ヲ奉シテ孤忠ヲ蒙リシ上佐勤王ノ魁ヲナセシ處降リテ戰國時代長宗我部元親一時此處ニ據リ慶長六年山内一豊公築城シテヨリ其居城タルコト二百七十余年明治六年公園トナシ本丸大手門ノ外櫓樓ヲ毀テ木石ヲ配シテナシ民遊覽ノ地トナス

縣社藤並神社

藩祖一豊公及夫人若宮氏並ニ二代忠義公ヲ祀ルニ豐公使用ノ毛拔太刀二口ハ國寶ナリ内ニハ一豊公ノ銅像アリ毎年十一月四日大祭ニハ甲冑ノ騎馬アリ武者數十騎ニ當リ大ナリ寫眞ニ見ユル大鳥居ハ魚梁從シテ盛一年ノ建設ニ係リ近クノ門ハ大手門ニシテ遠ク聳ユルハ天守閣ナリ

大高坂神社

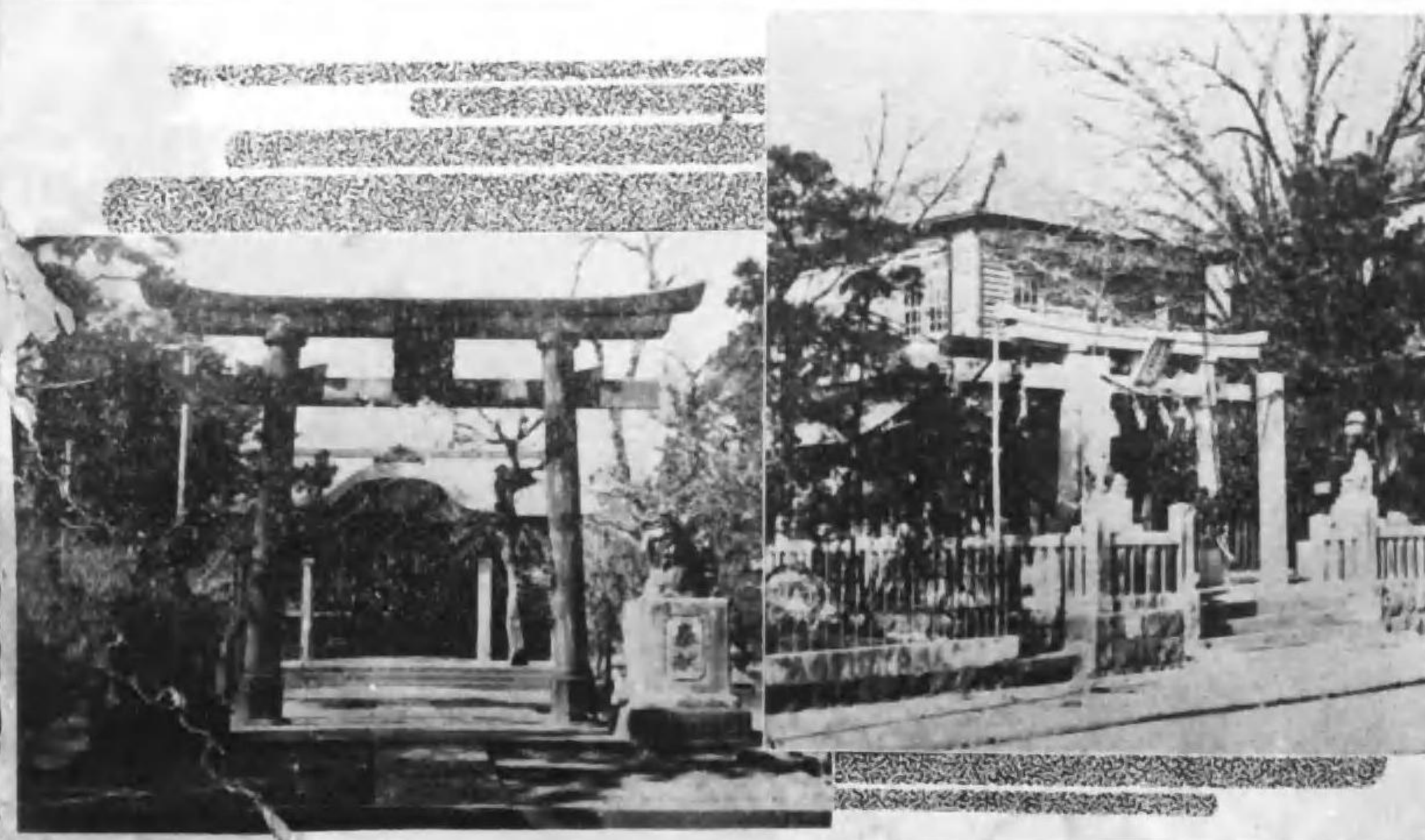
市役所構内ニアリ大高坂松王丸ヲ祀ル境内ニ亭々タル大銀杏樹下ハ松王丸ノ墳墓ノ地ナリト傳ヘラル

縣社天滿宮

筆山麓清流鏡川ノ畔ニアリ菅公筑紫ニ薨スルヲ遺臣松本春彦公ノ衣衾及遺髪ノ觀音像ヲ携ヘテ公遺子高親王ノ此ノ地ニ遷シセラルタレテ訪々來リ途中ニ死ス高親朝臣即チ是等遺品ヲ得テ之レヲ祀ル當社ハ道眞公ヲ祀ル處ニシテ曾テ藩公ノ尊信最モ篤ク神威今モ尙高シ

野中兼山先生邸跡及墓

藤並神社境内ニアリ當時ノ泉石井等尙存ス墓ハ潮江高見ニアリ頌德碑ハ潮江十日會並ニ縣教育會ノ建設ニ係ル



四、高知市の名勝 其の二

別格官幣社山内神社

徳川時柳原ニアリ第十五代藩主豊信公第十
六代藩主豊範公ヲ祀ル所ニシテ昭和九年ノ
創建ニ係ル四國唯一ノ別格官幣社ナリ毎年
十一月十日大祭ヲ行フ

武市瑞山先生終焉地及舊邸墓

此地ハ藩政時代南會所ノアリシ所ナリ文久
二年四月八日瑞山先生一ノ志士共ニ獄ニ
テ暗殺スルヤ翌年先生同志ノ士共ニ獄ニ
投セラレ爾レ四年慶應元年五月十一日此
ニ切腹ヲ命セラレ從容シテ四月十一日自
ニ切腹スルニ至リ

播磨屋橋

其ノ昔僧願信トお馬ノ悲戀ヲ語ル坊サン
ノ民謡ヨサコイ節ニ開エタル處今ハ街路ノ
ノ盛場トシテ商店櫛比賑賑ヲ極ム

鹿持雅澄先生墓

文化文政ノ頃ヨリ儒學ト國學ヲ修メ研究五
十年種代ノ名著萬葉集ノ古義九十五卷ヲ大
成シ又山齊集及千首集ノ歌集アリ安政五
年六月十八日高知縣教育會ノ建設碑ハ所
ナリ

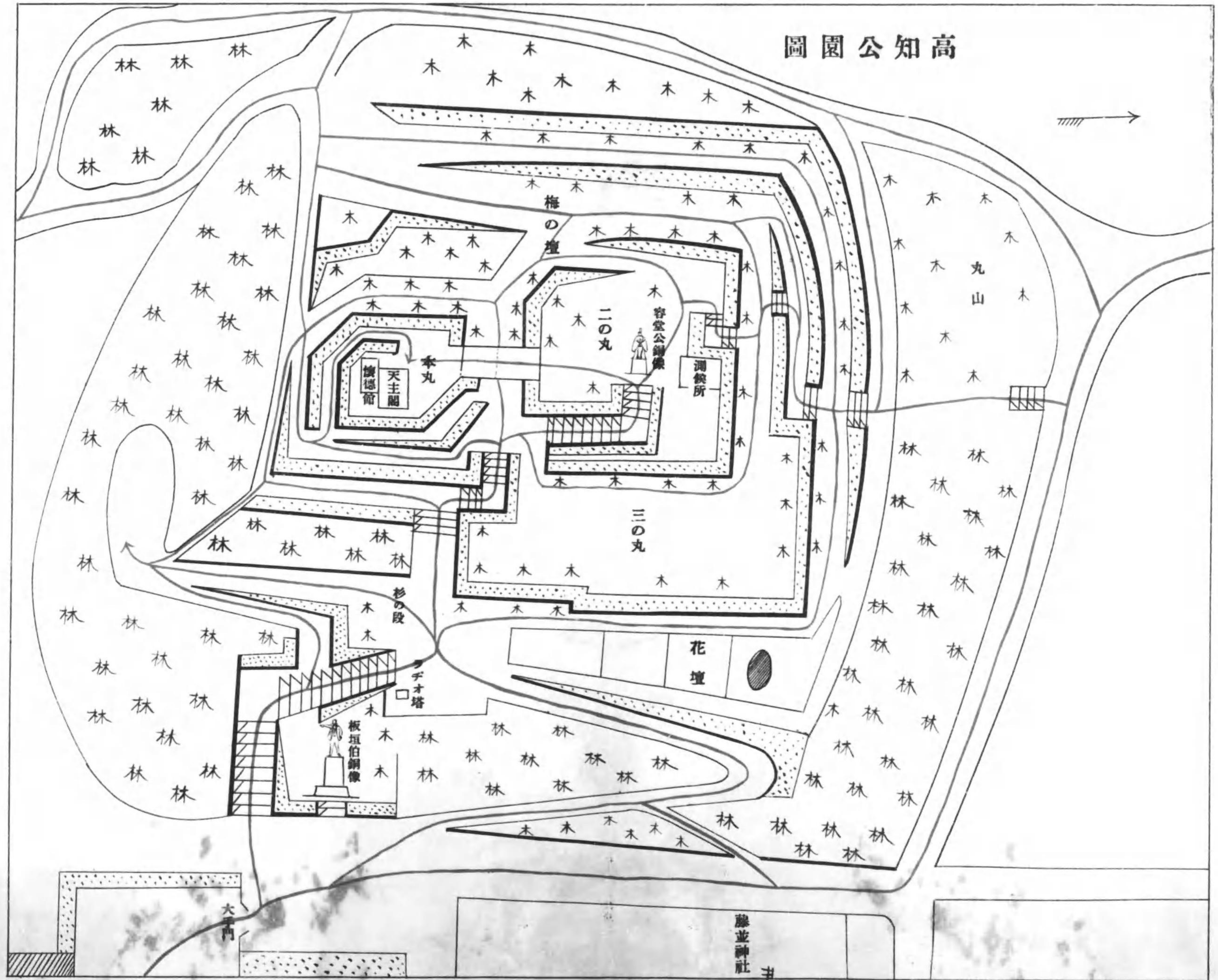
谷將軍舊邸ト墓

壯年ニシテ夙ニ維新回天ノ大業ヲ翼賛シ西
南ノ役熊本城ヲ死守シテ勇名天下ニ轟ク後
四年五月十三日薨シ貴族院ノ重鎮タリ
樓ト稱シ舊邸依然トシテ現存ス墓ハ舊邸背
後ノ山腹ニアリ
毎年命日ヲ期シ限山會主催ニヨリ法會嘉參
ヲ行ヒ遺風ヲ景仰ス

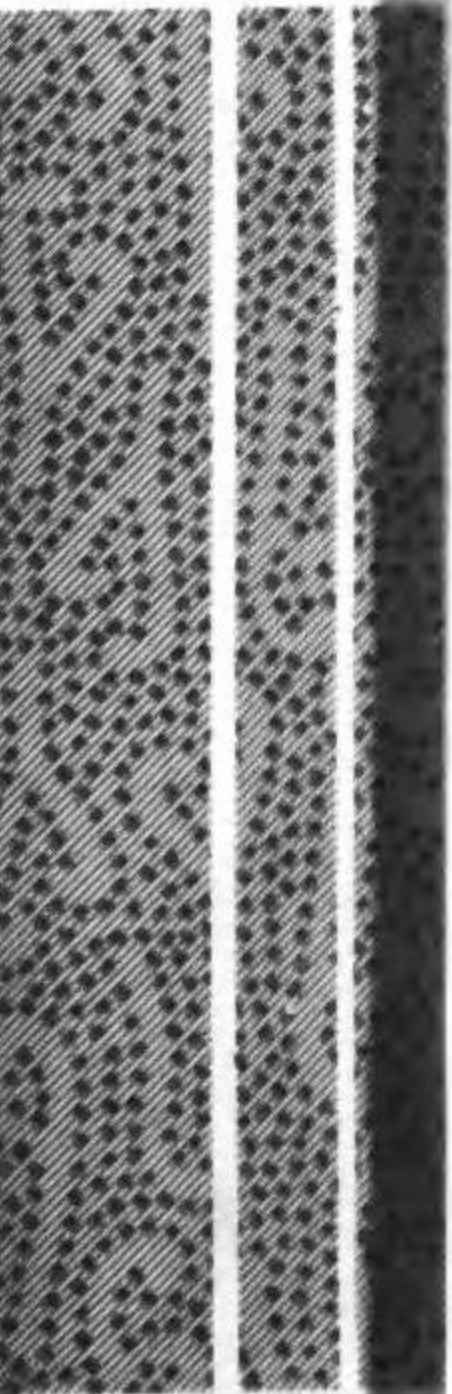


上山内神社 下

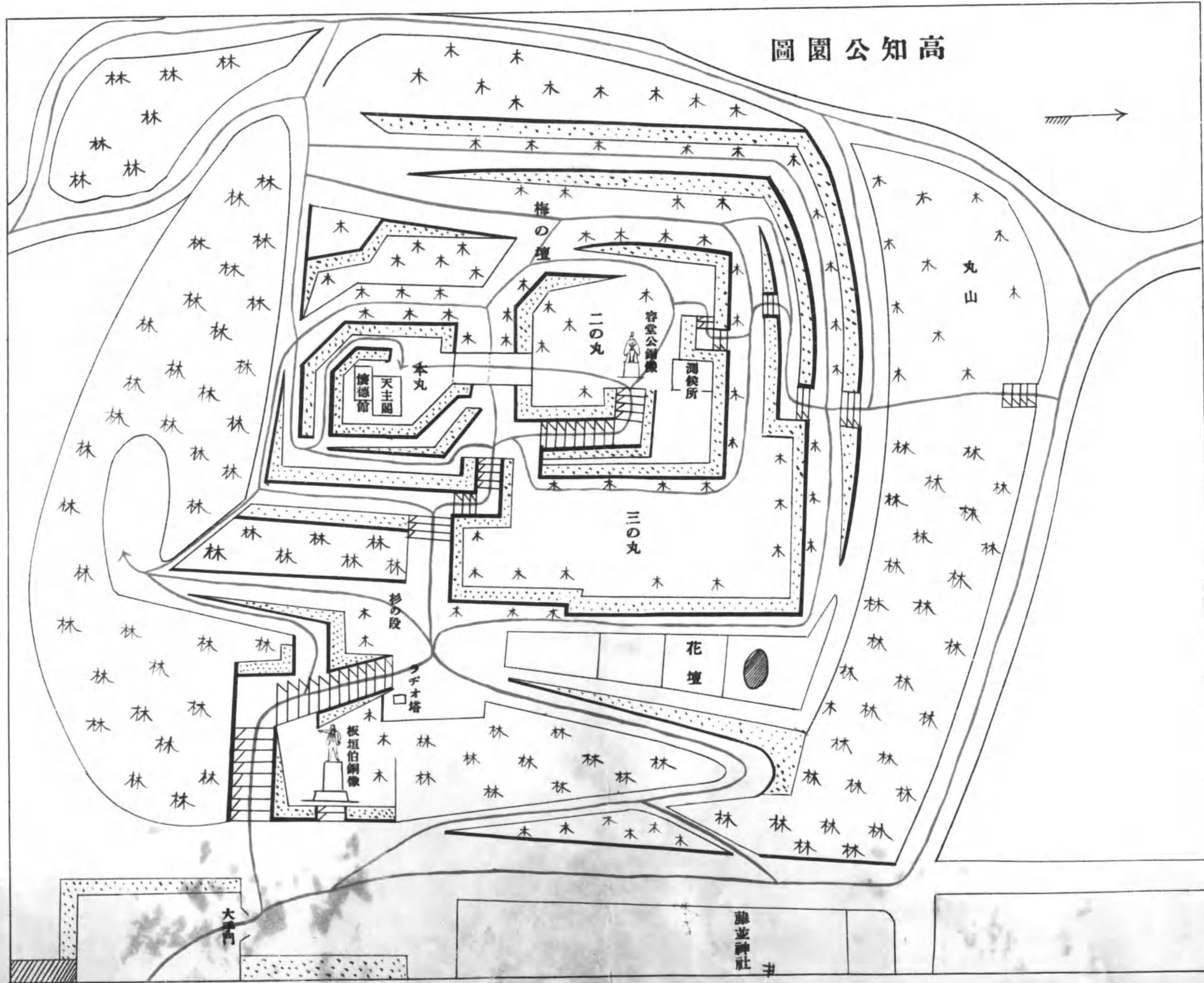
高知公園圖



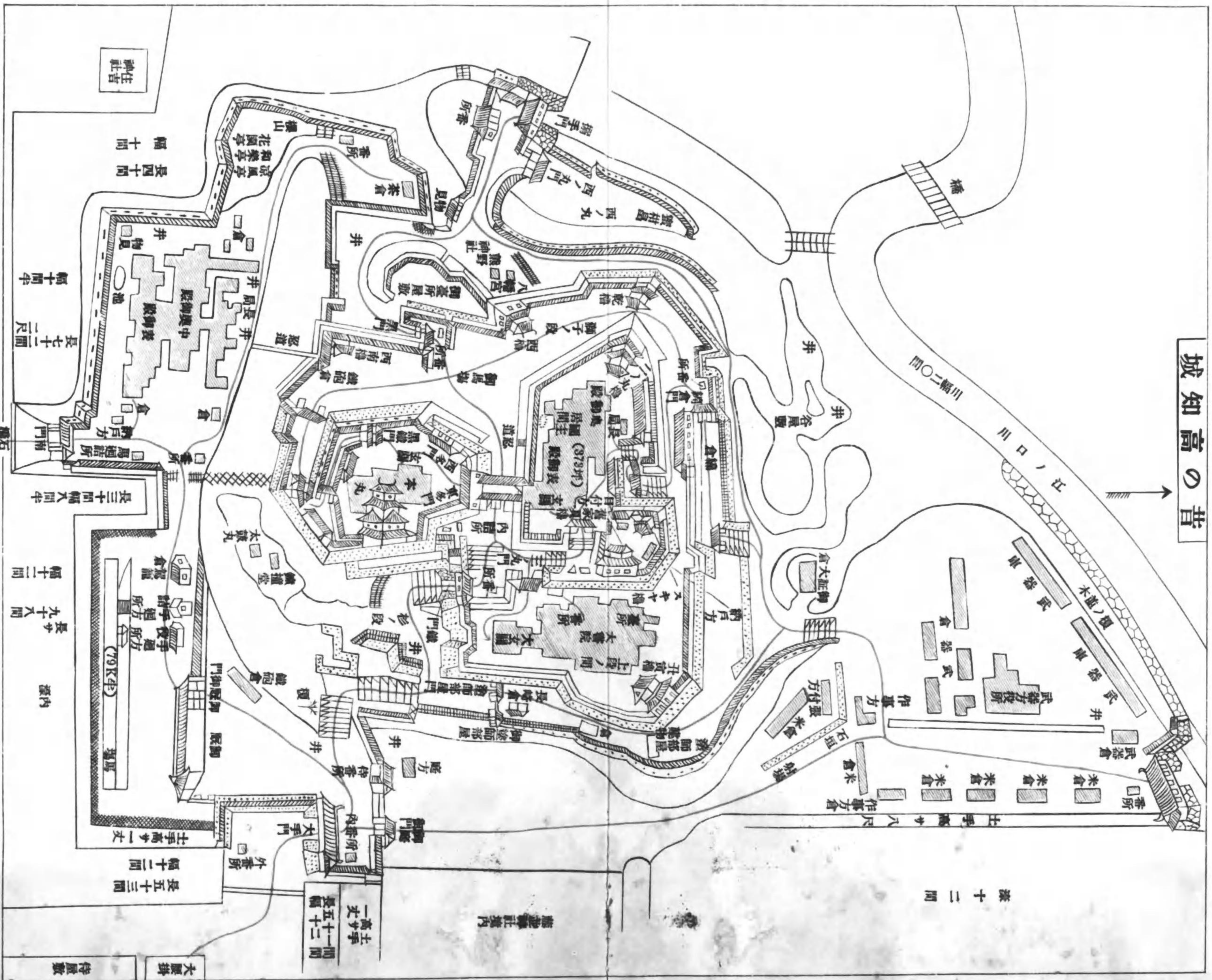
壯年ニシテ
 南ノ國ニ
 四年ノ間
 臺ノ上ニ
 樓ヲ築キ
 毎ノ日
 行ヒテ
 遺風ヲ
 景仰ス
 後ノ山
 命ヲ
 遺風ヲ
 景仰ス
 限山會
 主催ニ
 ヨリ法
 會草參
 壯年ニシテ
 南ノ國ニ
 四年ノ間
 臺ノ上ニ
 樓ヲ築キ
 毎ノ日
 行ヒテ
 遺風ヲ
 景仰ス
 限山會
 主催ニ
 ヨリ法
 會草參



高知公園圖



城知高の昔



長十二間

徳生社境内

高サ一丈五十二間
幅十二間

大腰掛

侍屋敷

長五十三間
幅十二間

外番所

土手高サ一丈

長サ九十八間
幅十二間

源内

長サ三十四間
幅八間半

馬廻所

長七十二間
幅十間半

殿御中

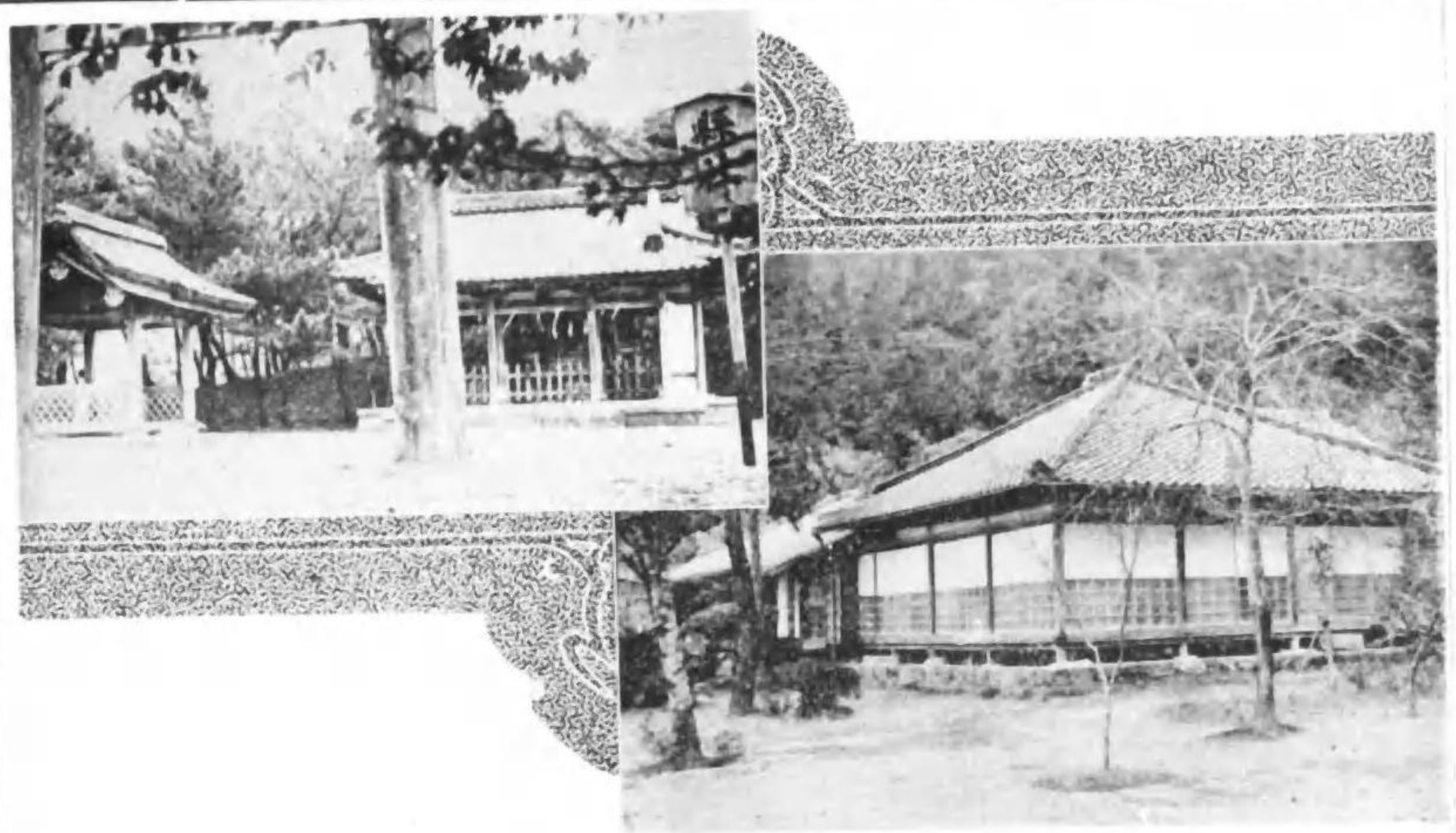
井物見

長四十間
幅十間

徳生社

七、浦戸灣一帶の名勝 其の二

上右 吸江



吸江寺

(五台山南腹)

文保二年夢窓國師ノ都塵ヲ此處ニ避ケ
庵ヲ結ンデ汲江庵ト稱シ禪定ス高弟義
堂絶海亦初メ此處ニ禪定シ室町幕府ノ
保護篤シ永祿ノ頃本寺ノ僧忍性朱子
學ヲ此處ニ修メ山内公入國ノ後名僧湖
南本寺ヲ中興シ法弟絶藏王(山崎闇齋)
初メ此ニアリテ野中兼山等ト共ニ碩儒
谷時中ニ就キテ儒ヲ修ム此ヲ以テ本寺
ハ士佐儒學發祥ノ著名ノ史蹟ナリ尊氏
ノ守本尊ト傳ヘラルル木造將軍地藏菩
薩ノ國寶ノ外寺寶多シ

春野神社

(五台山西端腹)

寛永十三年以來二十八年間土佐藩ノ賢
相野中兼山先生ヲ祭ル明治四十四年野
中詞ヲ遷シテ縣社トナス

招魂社

(五台山大島岬)

明治二年ノ創建ニシテ明治元年戊申役
以後國事ニ暗レシ忠魂三千ヲ祀ル始
メ官社トシテ棟角幔等ニ菊花ノ御紋ヲ
用フルコトヲ許サレシガ明治八年初メ
テ招魂社ト改稱シ後縣社ニ列セラレハ
毎年四月二日花木爛熳ノ候大祭ヲ行ハ
ル大島岬ノ突端法師ヶ鼻ノ泊船岸ハ
汲江十景ノ一ナリ

小倉三省先生墓

(五台山南腹)

先生ハ野中兼山先生ト共ニ藩治ト士佐
儒學ノ振興ニ不没ノ偉績ヲ遺シテ承應
三年七月十五日年五十一才ヲ以テ歿シ
遺骸ヲ此ニ葬ル最近高知縣教育會ノ幹
旋ニヨリ建設セラレタル頌德碑アリ

七、浦戸灣一帶の名勝 其の三

上 浦戸灣全景 下 巢山方面の



浦戸灣

高知市ノ海ノ玄關ニシテ南北二里餘ノ
入江瀟瀟ヲナシ四山ノ影倒ニ風景絶佳
且絶好ノ遊漁場ニシテ廻打ハ特殊ノ壯
觀ナリ
灣頭ノ高知埠頭ハ最近ノ改修ニ係リ東
西沿岸及阪神航路ノ基點、物貨ノ吞吐
口トシテ年額約三千六百萬圓四百噸ニ
上リ乗客數十數萬ニ達ス昭和二年重要
港灣ノ指定ヲ受ケ同年ヨリ内務省直
營ヲ以テ改修ニ着手シ岸壁ヨリ港口ノ
修築ニ至ル迄前後十餘年ニ渉ル大工事
ナリ完成ノ曉ハ三千トシ級ノ船舶自由
ニ出入スルヲ得ヘシ

玉島ト衣ケ島其他ノ島嶼

水上ニ浮ブ玉ノ如キ島ヲ玉島ト言フ神
功皇后土佐御巡航ノ砌此ノ磯邊ニ眞珠
ヲ拾ヒ給ヒシ傳説ヨリ名ヅケラル又鳥
ノ群ヲナシテ夕方來リ宿ルヨリ一名巢
山ト稱ス
妾しや玉島ねぐらの鴉
こがれなくぞへ夜もすがら
玉島ノ西ニ衣ケ島アリモト裸島ト稱セ
シガ藩主容堂「衣物をきてやれ」ト
言ハレシヨリ衣ケ島ト名付ク
更ニ其西水口山ニハ濱口雄幸先生祖先
ヲ祀ル水口神社アリ
浦戸灣口ニ近キ狭島ハ仲哀天皇行幸ノ
傳説アリ立並ブ姫小松モ愛ラン



寺

七、浦戸灣一帶の名勝 其の四



濱口雄幸先生誕生地

(市外五台山村唐谷)

先生明治三年四月此處水口家ニ生レ後安藝郡田野村濱口家ニ入ル迄ノ邸宅ニシテ舊態依然トシテ偉人ノ往時ヲ憶ハシム先生雅號ヲ空谷ト稱セシハ唐谷ニ因ムモノナリ

武市瑞山先生舊邸及墓

(三里村吹井)

先生文政十二年九月廿七日此處ニ生レ嘉永三年城下田淵ニ轉居スル迄住居スル處ニシテ今尙當時ノ状態ヲ失ハス表ノ間ノ柱ニ殘レル自刻ノ跡ヲ弟ヲ教育セル納屋ノ二階等往時ヲ追懷ニヨリ舊邸保存ノ企アリ

先生慶應元年五月十一日城下南會所ニ自刃スルヤ遺骸ヲ舊邸前方ノ山腹先登ニ墓地ニ葬ル一基ノ墓碑詣ゾルモノヲシテ漫ニ無量ノ感慨ニ耽ラシム

自由ノ松原及板垣伯邸址

自由ノ松原ハ東孕ニアリ板垣伯別荘ノ跡ナリ松原ハ東孕ニアリ板垣伯別荘ノ社ヲ創設シテ大ニ自由民權ノ思想ヲ鼓吹シ明治十年自由黨ヲ組織ス當時有志糾然トシテ其ノ傘下ニ集ル此處自由志松原ハ當時保守黨谷干城將トシテ畫夜ニ互リ論戰シ兩雄互ニ自說ヲ持シテ讓ラス遂ニ論争別レトナリシトコロ、松箱颯々トシテ當時ノ政論ヲ聞クニ似タ

邸址ハ鏡川マロ南岸ニ近キ新田ニアリ一基ノ碑其ノ遺跡ヲ傳フ

八、種崎、桂濱、長濱方面の名勝 其の一



千松公園 (長岡郡三里村種崎)

縣立公園ニシテ南ハ浦戸港口ヲ隔テ、桂濱ニ對ス、砂濱ノ翠松數千本枝ヲ交ヘテ涼味萬斛白沙廣ク、前方太平洋ノ遠望無涯水天ニ連リ海水浴ノ絶好地ニシテ附近ニゴルフ場アリ此處ヨリ東方一帶ノ砂濱ハ促成栽培地トシテ産額多ク其名ヲ知ラル

港口ニ近ク水族館アリ

桂濱 (吾川郡浦戸村)

浦戸港口南側龍頭岬ヨリ南方龍王岬ニ至ル一帶青松白沙三日月形ノ砂濱ナリ渚ヲ洗フ浪ノ音ハ岸上ノ松籟ト相應シ寄セテハ返ス白龍ハ遊人ノ裾ヲ襲フ浪怒レバ巖頭高ク白馬躍リ飛沫天ニ沖ス遠ク太平洋上一望際涯ナク薩摩風ハソヨノトシテ袂ヲ拂フ皓月水平線上ニ出ヅレバ銀蛇蜿蜒トシテ洋上ニ横ハリ金波皓々トシテ千々ニ碎ケ月ノ名所トシテ古來文人墨客ノ間ニ喧傳セララル南端龍王岬巖頭ニ龍宮祠アリ

砂濱ニアル五色ノ礫石ハ好事家ノ珍重スル所ナリ

文豪大町桂月先生痛ク此ノ景勝ヲ愛シテ桂月ト號ス崖上ニ桂月碑アリ

土佐民謡

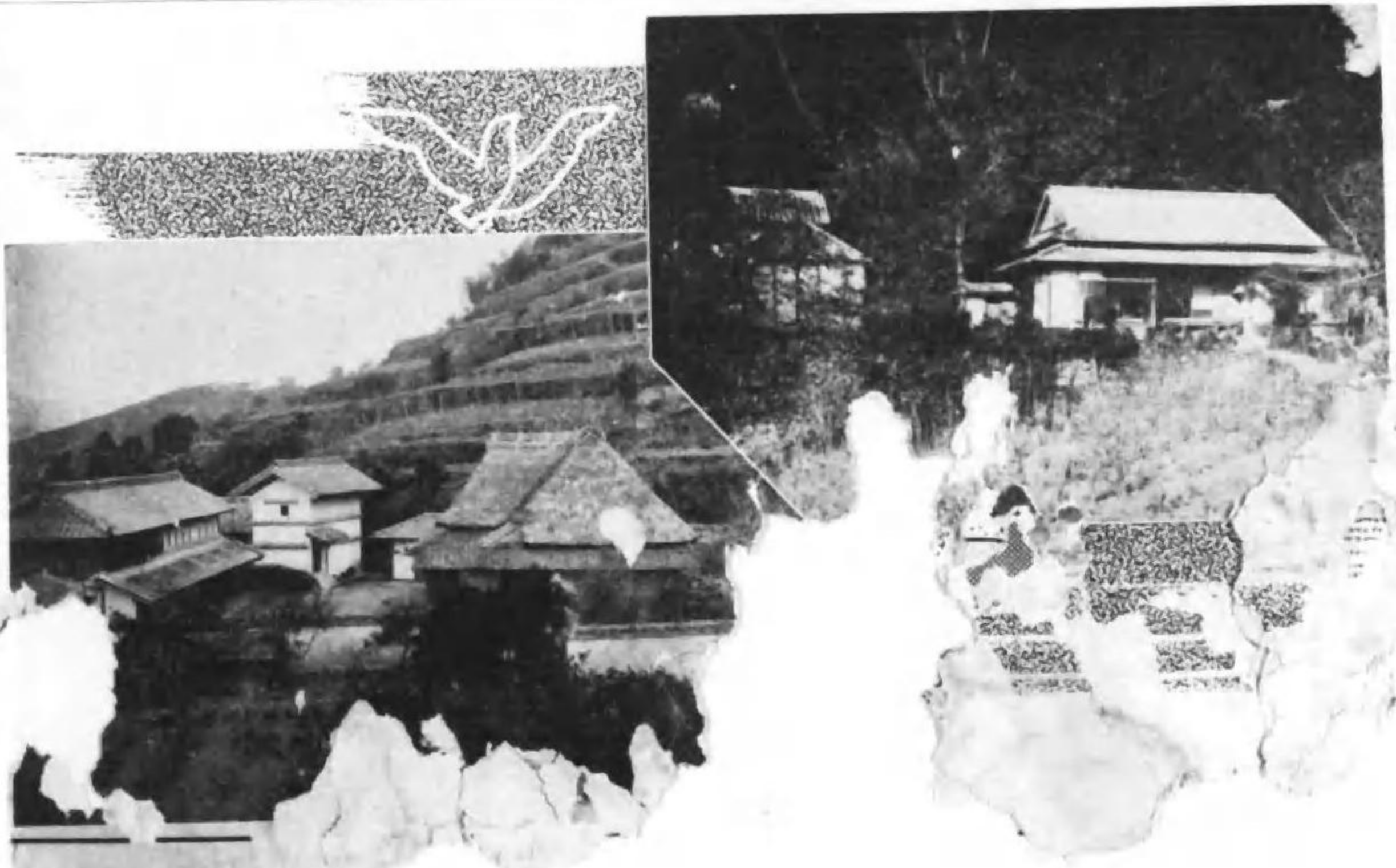
みませ(御疊瀬)見せましよ浦戸をあけて 月の名所は桂濱



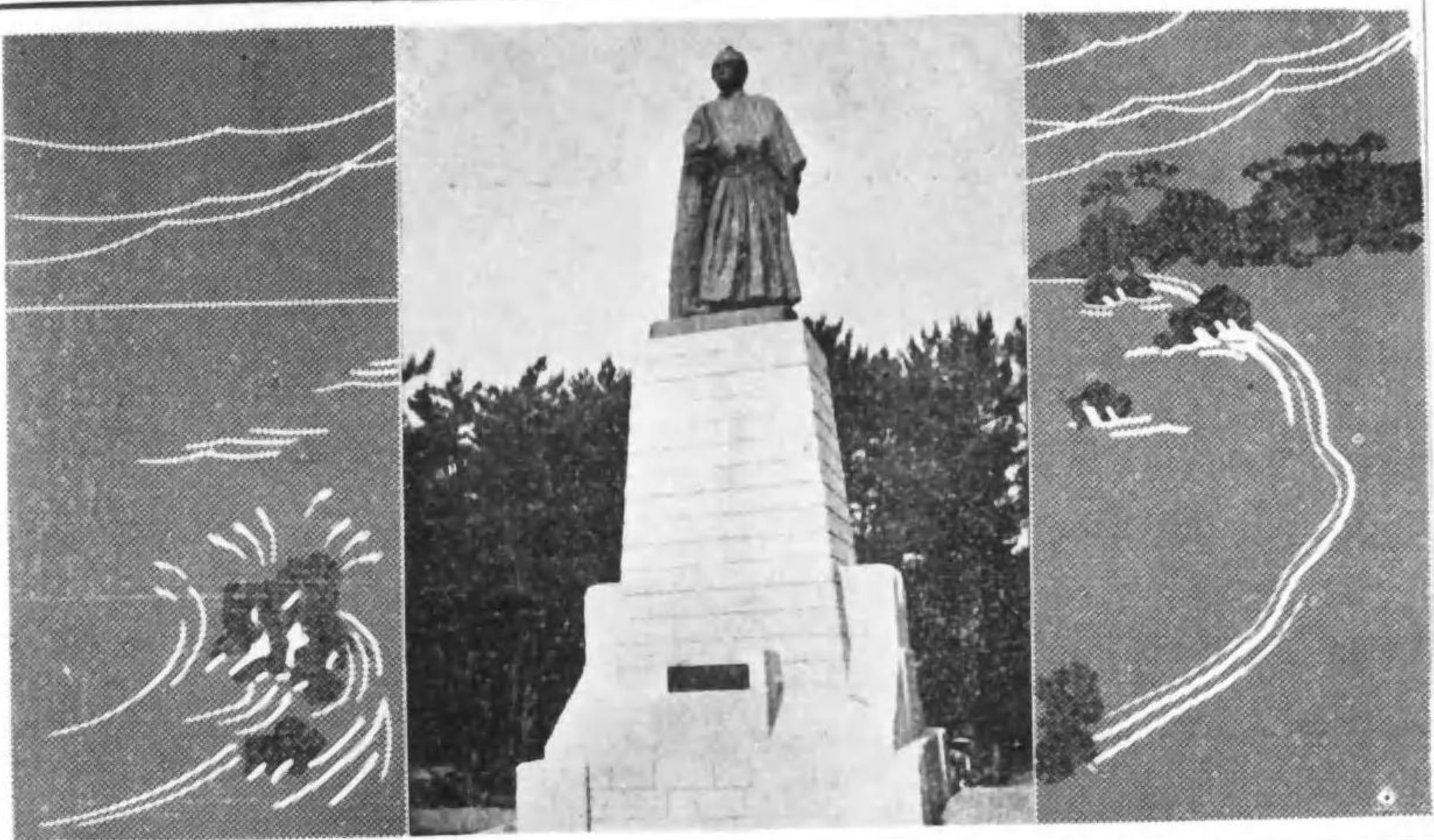
上 種崎の千松公園

下 桂濱

上 高知坂頭 4 像



八、種崎、桂濱、長濱方面の名勝 其の二



坂本龍馬先生銅像 (桂濱龍頭岬)

維新ノ俊傑坂本龍馬先生ノ鴻業偉動ハ普ク人ノ知ル所永ク後人ノ景仰ノ的ナリ此處白龍躍ル龍頭岬巖頭龍馬先生ノ銅像堂々トシテ遙カニ大洋ヲ睥睨シテ立テリ

浦戸城址 (浦戸村山上)

天正十九年ヨリ慶長五年迄十年間長宗我部元親居城ノ地ナリ今尙一ノ丸二ノ丸空濠古井ノ跡歴存シ古木鬱蒼トシテ天日ヲ遮リ蔓草人ヲ埋メテ當年ノ盛衰ヲ追懷セシム 土佐民謡 浦戸城址で尾花がそよぐ 誇る秦氏の夢のあと

近時附近ノ山ヲ開キテ公園トナシ自動車ヲ通ズ

長宗我部元親公墓 (長濱町 天市寺山)

元親公慶長四年年六十一才偉業英名ヲ遺シテ伏見ニ卒スルヤ子盛親遺骨ヲ此處ニ葬ル天市寺山腹松吹ク風ノ音颯々トシテ苔蒸ス墓石永ヘニ英風ヲ傳フ

秦神社 (長濱町)

長宗我部元親公ヲ始メ一族並ニ戸次川戦死者ノ靈ヲ祀ル明治維新後雪溪寺ニアリシ公ノ木像ヲ移シテ此處ニ安置ス

八、種崎、桂濱、長濱方面の名勝 其の三

上 雪溪寺 下 若宮八幡宮

雪溪寺 (長濱町)

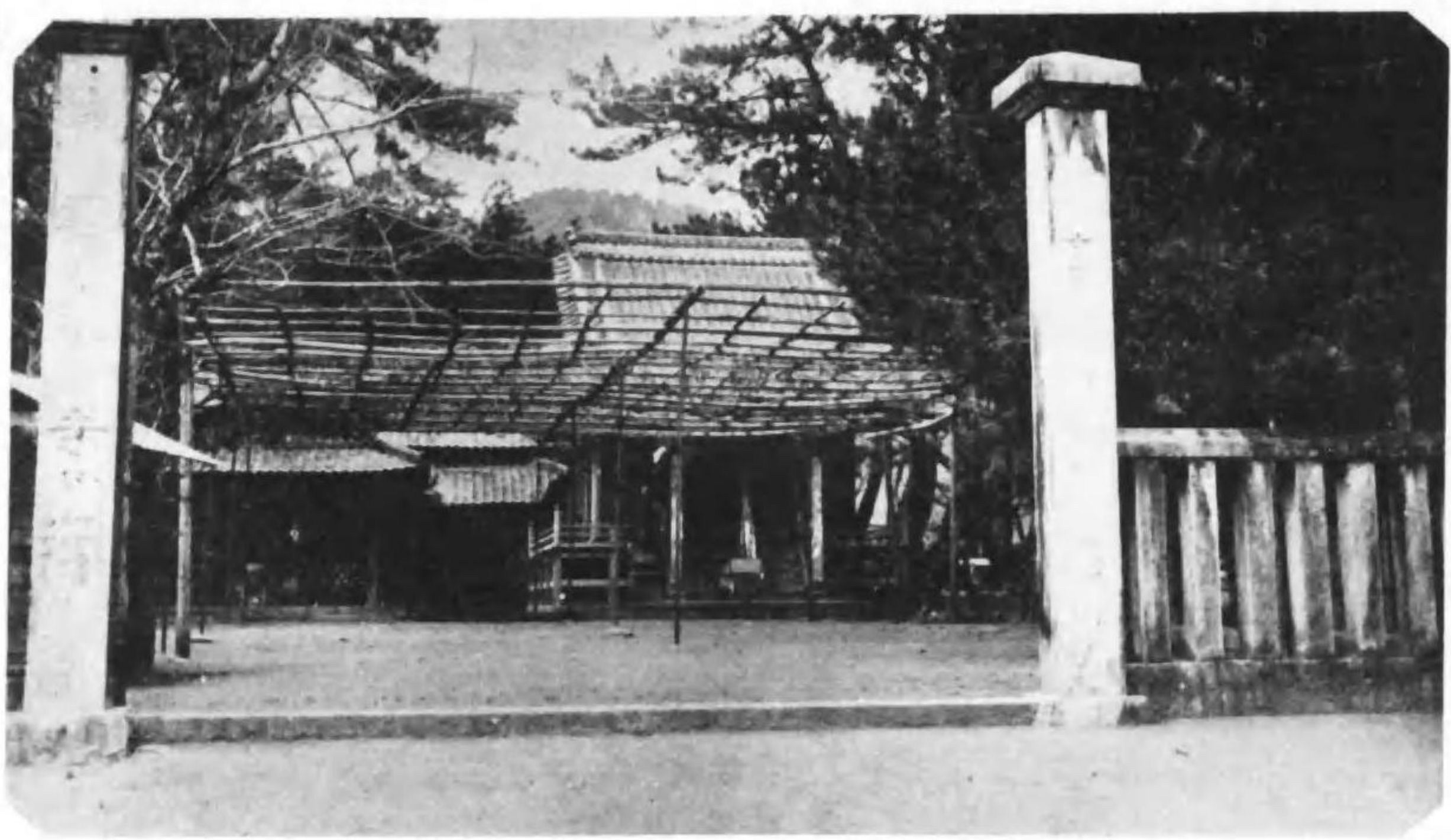
四國靈場三十三番ノ札所ナリ元親公浦戸築城ノ後ハ城下第一ノ梵刹ニシテ公ノ歿後ハ菩提寺トシテ其木像ヲ安置ス國寶ニハ運慶堪慶ノ名作毘婆伽其他三十佛像アリ鎌倉時代ノ逸品ナリ 戦國時代住持天室程朱ノ學ヲ此處ニ修メ慶長元和ノ頃當時ハ實ニ土佐南學ノ淵藪タリ 境内ニ元親ノ長子盛親ノ墓アリ

谷時中先生墓

先生ハ土佐南學ノ鼻祖ニシテ兼山三省闇齋ノ師ナリ慶長二年十二月年五十二才ヲ以テ歿シ遺骸ヲ此處ニ葬ル清川神社即チ是レナリ

若宮八幡宮 (長濱町)

七百五十餘年前京都ヨリ勸清セルモノニシテ長宗我部氏ノ崇敬厚ク出陣祈願所トシテ社殿ノ構造出蜻蛉式ニシテ國幣中社土佐神社ノ入蜻蛉式ト並ビテ本國內稀有ノ建物ナリ



十、龍河洞方面の名勝 其の二

(一宮 岡豊 國府ヲ經テ)

紀貫之遺跡

ニシテ内務省特別保護建造物ナリ寺藏ノ藥師如來像ニ驅ハ國寶ニシテ其他寺寶多シ

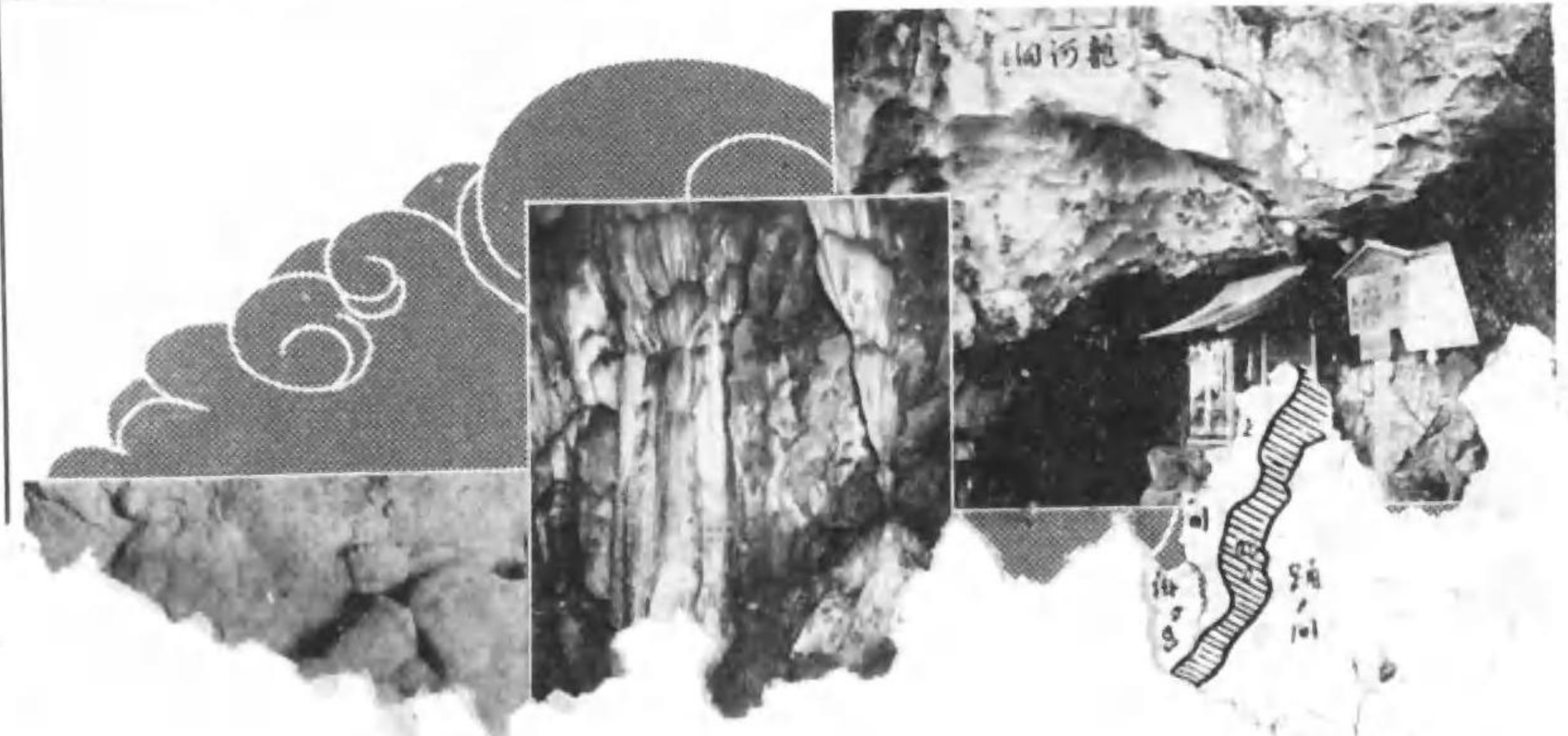
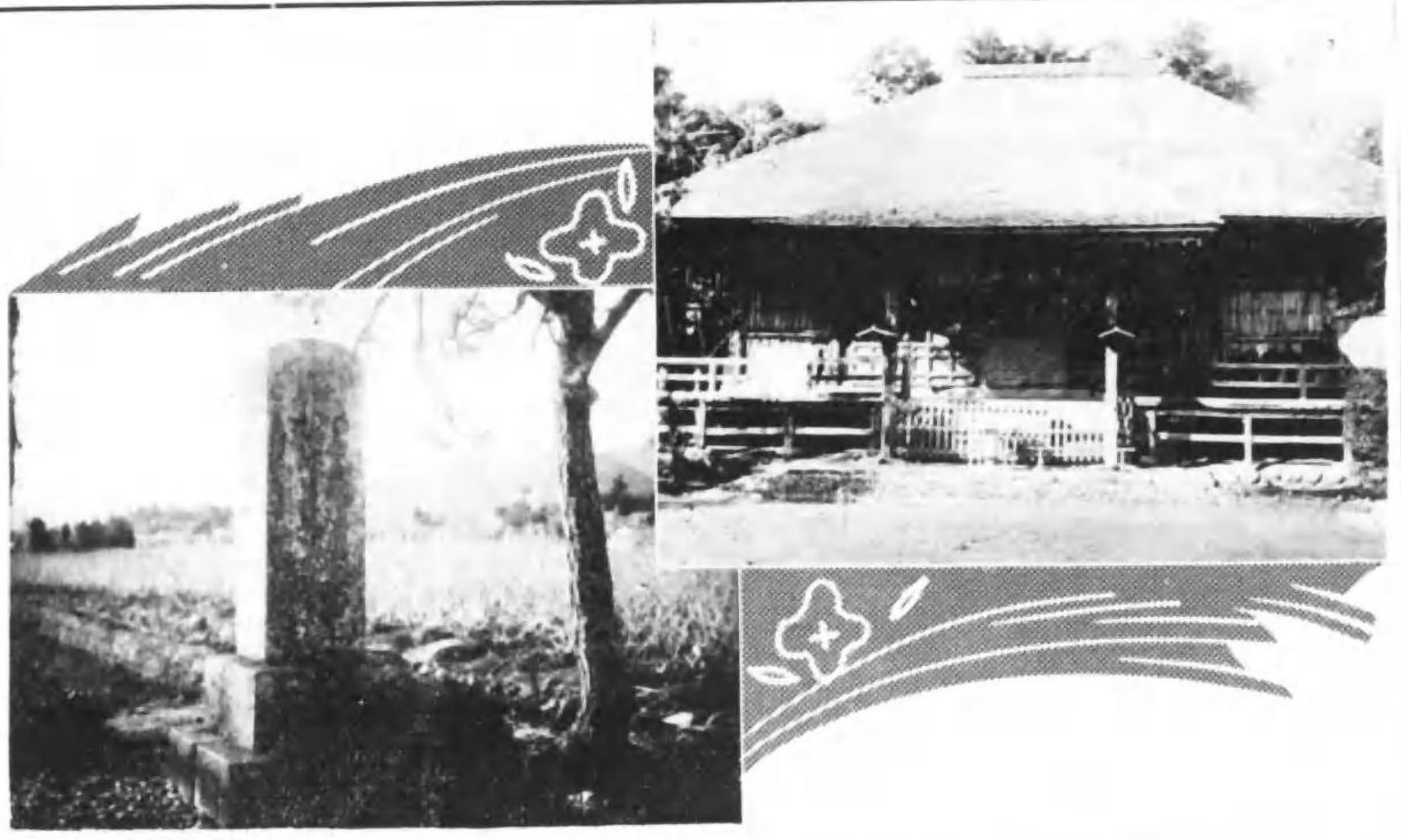
紀貫之遺跡 (長岡郡國府村比江)

國府ノ地ハ上古王佐政廳ノ所在地ニシテ醍醐帝ノ延長八年ヨリ朱雀帝ノ承平五年迄紀氏國司トシテ此處ニ在任ス、紀氏京都ノ比叡ニ擬シテ比江ト稱ス右ノ碑ハ天明五年尾池春水ノ建立ニシテ山内豐雅公ノ家額日野大納言資枝郷ノ和歌(あはぐ代にあとりしところ末遠くつたえんためと残すいじぶみ)清原宣隆ノ銘文ヲ刻セルモノ左ノ碑ハ文化六年山内豐興遺跡碑文ヲ松平榮翁公ニ請ヒテ之ヲ得タリシモ未ダ建碑ニ至ラザリシヲ大正十年建設セルモノ山内豐景侯ノ家額ヲ刻ス

龍河洞 (香美郡佐古村逆川)

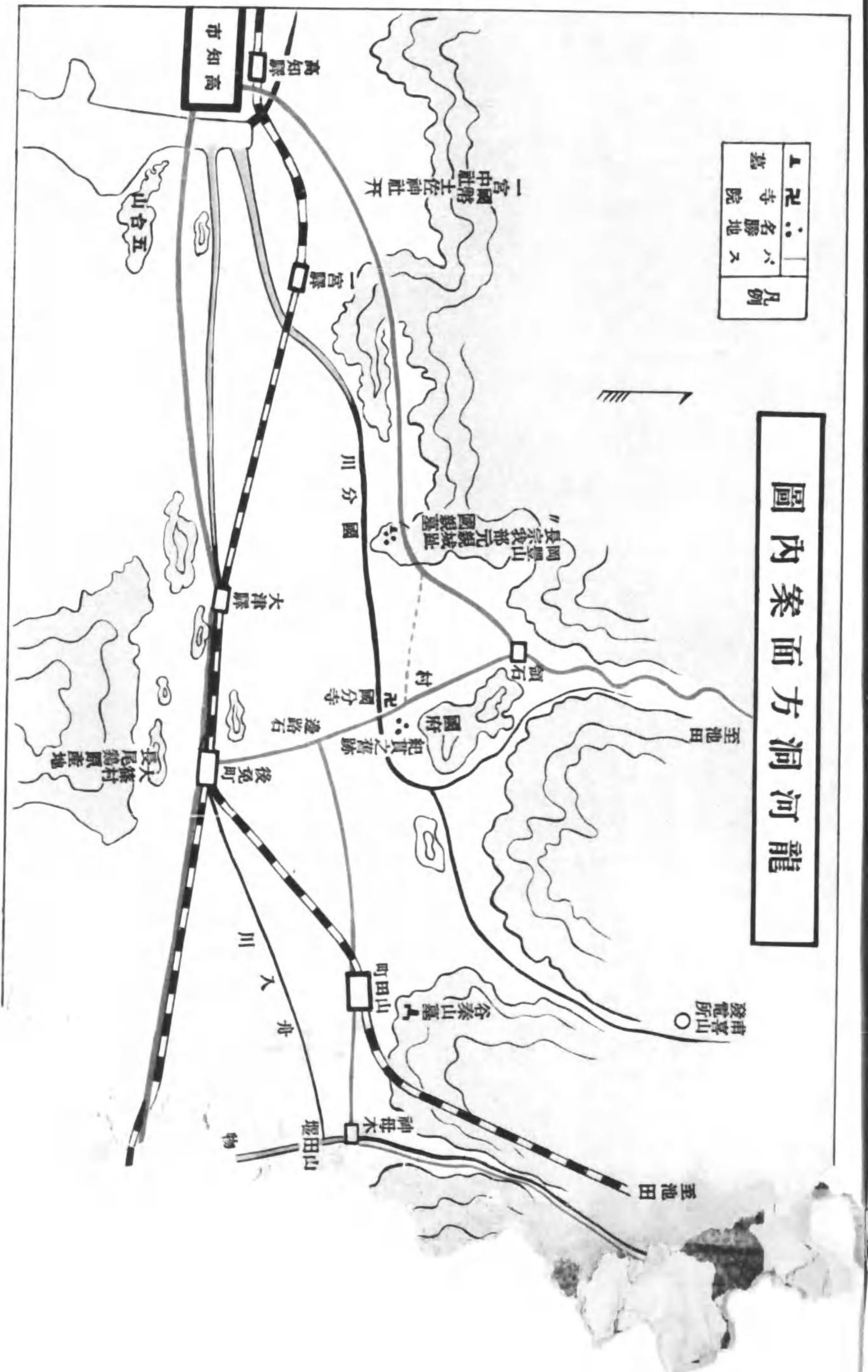
物部川ノ東三寶山ノ中腹ニアリ枝洞ヲ合セテ延長一呎余洞内廣狹高低變化ニ富ミ次第ニ上リ坂トナリ最高點ハ入口ヨリ高キコト六十米洞中ニハ瀧アリ大段階アリ就中記念瀧及一ノ瀧ハ高サ七米余入口ヨリ約百米ニシテ上下二洞ニ別レ更ニ百米ニシテ兩穴再ヒ合ス隨所ニ見事ナル鐘乳石石筍千姿萬態ヲナシ就中前ノ千本奥ノ千本ハ總景ト稱セラル

近年洞内ニテ燻生式土器多數ト貝殼獸骨等ヲ發見セラル土器ハ先住民族ノ使用セシモノニシテ三千年以前ノモノト稱セラル近年保勝會ニヨリテ入洞者ノタメ設備ヲ完備シ利便ヲ計レリ



▲	凡例
●	名勝地
○	巴士
□	寺院
■	墓

龍河洞方面案内圖





十一、室戸岬方面の名勝 其ノ一

姫倉月見山 (香美郡岸本町)

香美郡南方姫倉山ノ南端ニシテ傳ヘ言フ、
承久ノ亂後土御門上皇本縣轄多郡ニ遷幸シ
給ヒ在スコト一年、阿波ニ遷座サセ給フ御
途此山ニ月ヲ賞覽シ給ヒ「鏡野や誰がいた
づらの名のみにて戀ふる都のかげもうつさ
ず」ト悲情ヲ述ベ給フ依リテ名ヅケテ月見
山トイフ山下手結ノ常樂寺ハ當時行在ノ跡
ナリト傳フ

手結港及海水浴場 (香美郡夜須村)

手結港ハ手結岬ノ西側ニ抱カル、所慶安三
年野中兼山先生之ヲ試掘シ承應元年再掘シ
テ竣工ス其後港口閉塞シテ大船ヲ通セサル
ニ至リ明治四十四年縣費ヲ以テ修築ス附近
及岬端住吉一帯ノ海濱ハ海水浴ノ好適地ニ
シテ又風景絶佳夏季浴客多シ

八流山古戦場 (安藝郡赤野村)

永祿十二年長宗我部元親精兵三千ヲ以テ安
藝城ニ迫ラントスルヤ城主安藝國虎二千騎
ヲ以テコ、ニ激戦シ安藝軍大敗セシ古戦場
ナリ

岩崎彌太郎男舊邸 (安藝郡井ノ口村)

安藝町ノ北方ニアリ一代ノ風雲児三葉ノ始
祖岩崎彌太郎男ガ少壯時代起居セシ舊邸ニ
シテ今尙舊態ヲ保存シ偉人ノ遺墓ノ資トナ
セリ

維新殉難二十三氏墓 (安藝郡田内町)

烈士ノ首領清岡道之助ハ田野村ノ郷士ナリ



上手結と住吉

下右 岩崎彌太郎
下左 維新殉難二十三氏墓

スーコ光觀の面方洞河龍

スーコ南			スーコ中			スーコ北		
物	乘	光觀	物	乘	光觀	物	乘	光觀
野村バス(約五十分)		りはま橋やま	汽		驛知高	バス(二十分)		りはま橋やま
	鶏尾長	篠大	車		驛宮一	徒歩(十分)		宮一
		免後	(三十分)		驛津大			岡
		田立	省營バス(十分)		驛免後			府國
		市野	徒歩	慕山秦谷	驛田山	バス(二十分)		岡長
		古佐		洞河龍	木母神	徒歩		田山
		洞河龍		古佐	古佐			木母神
								古佐

龍河洞内部分圖



龍河洞内部分圖

十一、室戸岬方面の名勝 其ノ二

上 魚梁瀬森林



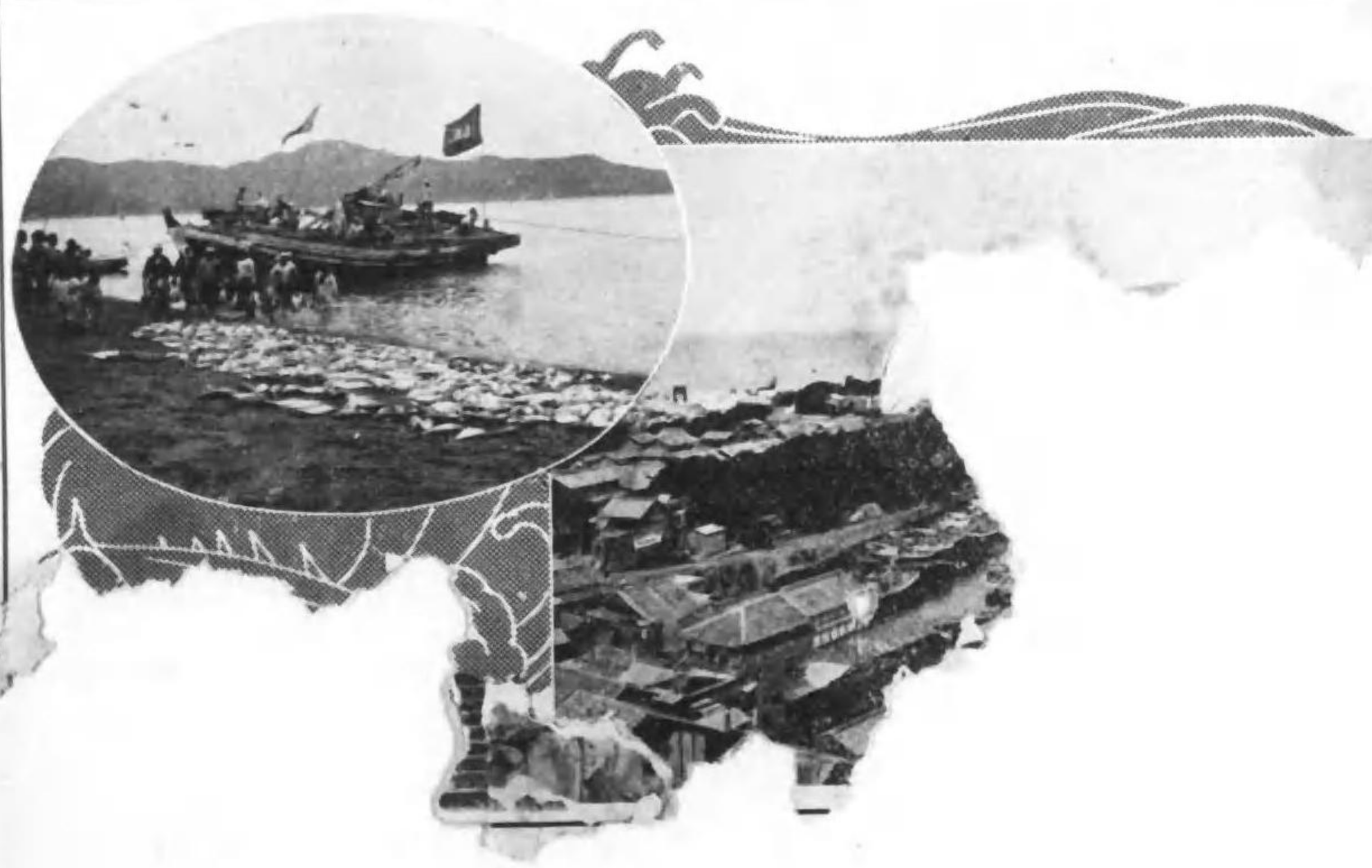
嘉永以來同姓治之助等ト互ニ國事ヲ憂ヘ東奔西走身ヲ忘ル時ニ藩論結息志士ノ獻言ヲ用ヒス道之助等憤慨激遂ニ同志二十餘人ト野根山ニ屯集ス藩以テ結黨叛ヲナストナシ捕ヘテ悉ク之ヲ奈半利河畔ニ斬ス道之助受刑ニ臨ミ從容朗吟シテ曰ク「嗚呼男子廿三歳」ト言半バニシテ頭已ニ際ツ福田寺内二十三日ノ墓碑年輪十六才乃至二十餘才弔客ノ悲涙ヲ催スモノアリ

魚梁瀬森林 (安藝郡馬路村)

全國無比ノ理想的森林ニシテ其面積九千六百町歩總蓄積量四百萬立方米ニ達シ杉其他ノ良材ニ富ミ日本三大天然林ニ數ヘラル就中千本峠一帯ノ原始林ハ大正四年ノ御大典記念トシテ農林省ヨリ永久保安林ニ指定スル所ナリ、高知營林局ハ巨費ヲ投シテ森林鐵道其他ノ近代的施設ヲ完備シ田野安田奈半利各地ヘ搬出セラル、木材年々百萬圓ヲ越ヘ實ニ無盡ノ一大寶庫ト稱セラレ

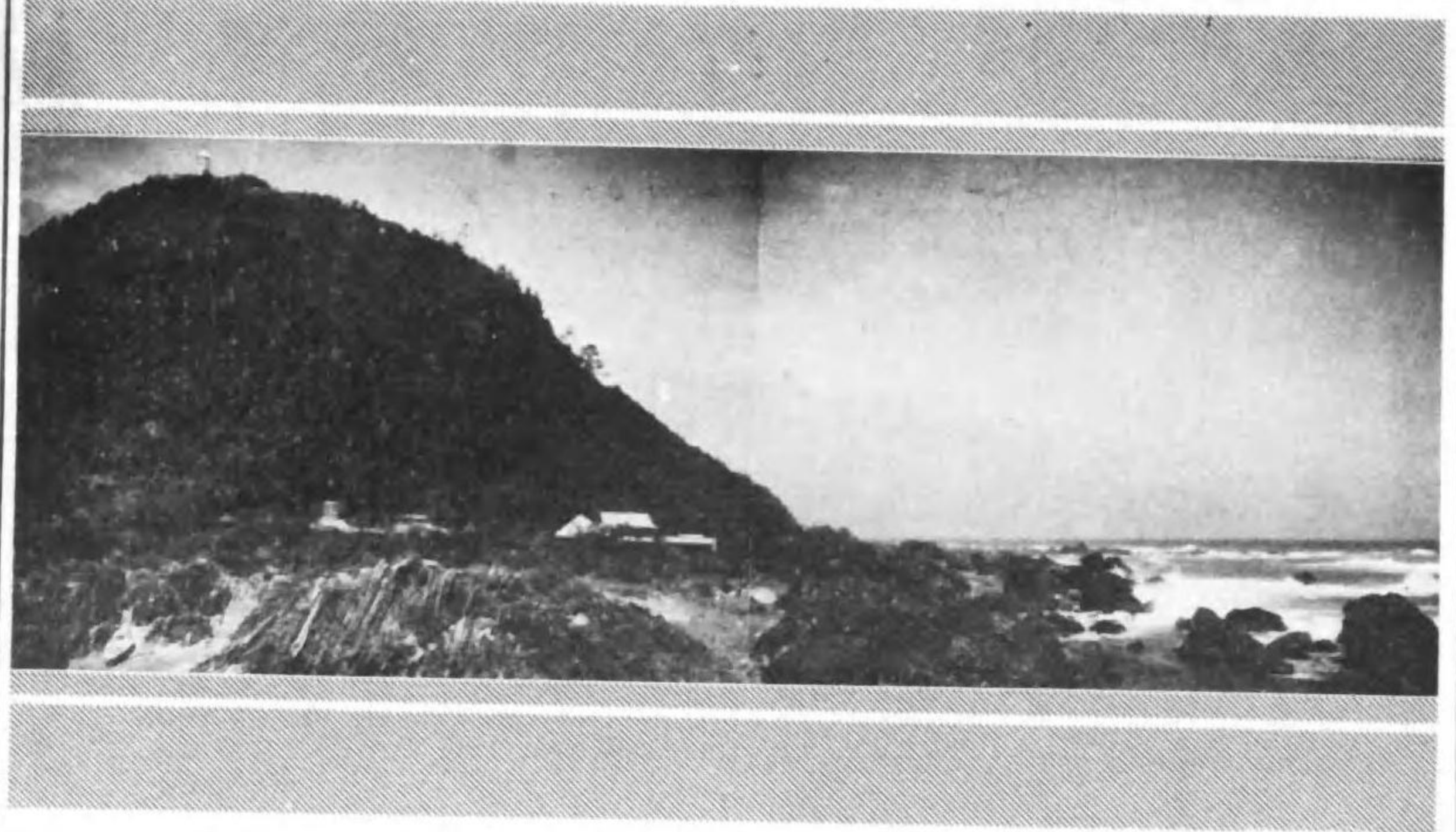
室戸港 (安藝郡室戸町)

延寶七年一木權兵衛政利ノ獻身開墾セシ所寬文年間野中兼山先生津呂港ヲ開墾セシモ尙狹隘ナリ是ニ於テ先生歿後權兵衛當港ヲ開キ終ニ犧牲トナル風光畫ノ如ク漁商船ノ安全港タリ當港ハ幡多郡清水港ト東西相並ビテ本縣漁場ノ一大中心ヲナシ漁船ノ出漁ノ快壯ナル、大漁旗ノ飄然トシテ鰯拍子高ク入港ノ勇壯ナル港内常ニ活氣ニ充ツ



十一、室戸岬方面の名勝 其ノ三

上 室戸岬全景 下同



本縣東南端ニ突出セル一大岬端ニシテ斷崖ヲナシ一帯ノ海濱ハ奇巖亂礁ノ間白龍躍リ時ニ狂濤激ニ激シテ高ク天ニ沖シ豪壯眞ニ言語ニ絶ス東南三方見渡ス限り茫茫無邊浩然ノ氣胸ニ溢ル

室戸岬熱帶植物 (岬頭)

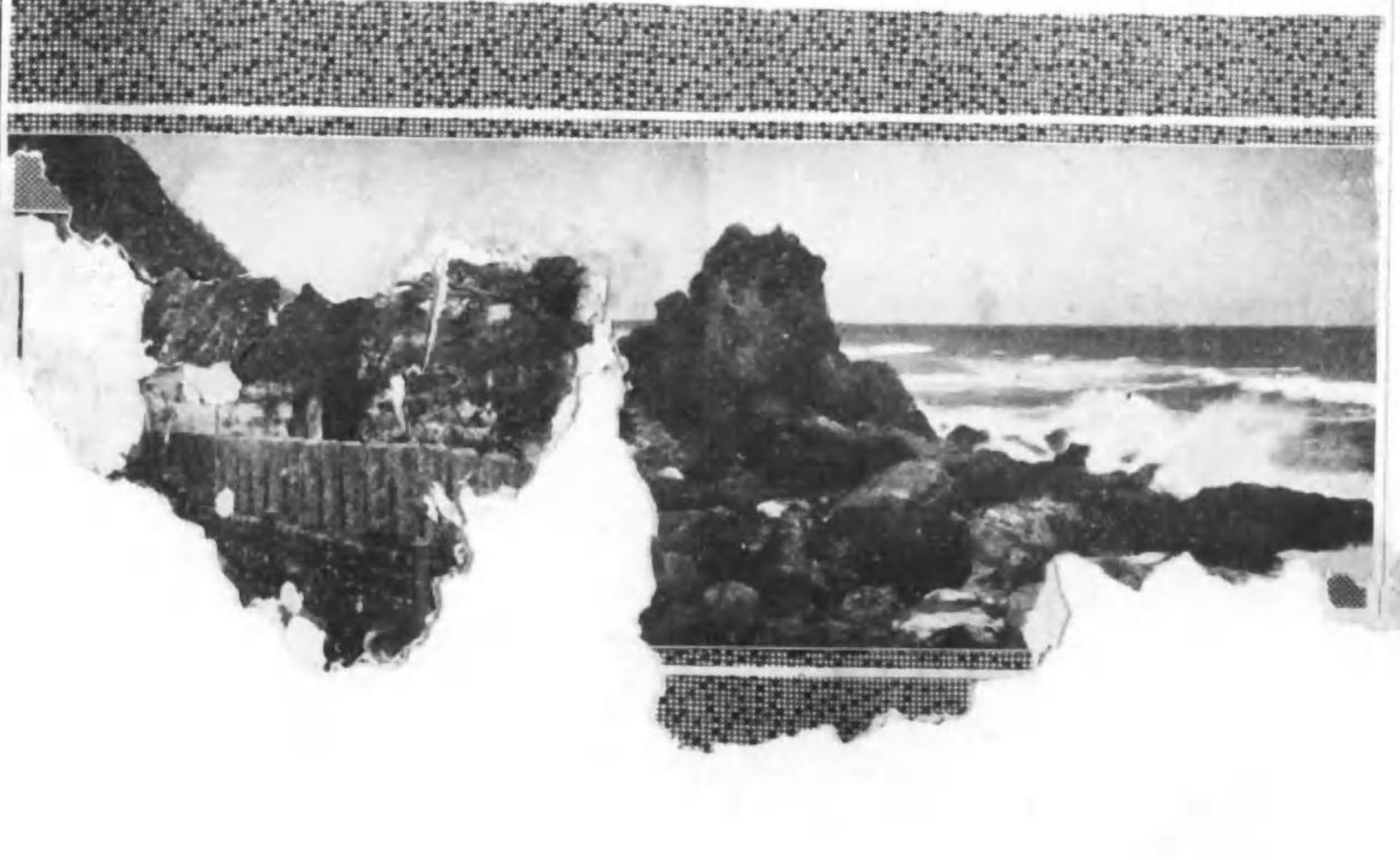
岬端附近一帯ハ我國ニ於ケル熱帶植物ノ極北地帯ニシテ榕樹梧桐等ノ自然林隨所ニアリ又羊齒類ノ珍種多ク我國植物學界ノ一大寶庫ナリ大正十年榕樹ノ自生林ハ既ニ天然記念物ニ指定セラレシガ昭和三年更ニ岬端一帯ヲ「室戸岬亞熱帶性樹林及海岸植物部落」ノ名稱ヲ以テ内務省天然記念物保護區域ニ指定セラル

中岡慎太郎先生銅像 (岬頭)

仰ギ見ル巨像ハ桂濱、龍頭岬頭ノ坂本先生ノ銅像ト相對シテ室戸岬頭狂瀾ノ邊リ松籟ノ中ニ屹立シ恰モ暮末風雲ノ中ニ馳驅セン俊傑ノ往時ヲ語ルガ如ク絶大無限ノ教訓切リニ後人ノ肺腑ヲツクモノアリ

空海修法遺跡 (岬頭)

岬端ヨリ東北方約七町左側ノ崖腹ニ二大洞窟アリ一ツハ高サ五間奥行約十間



十一、室戸岬方面の名勝 其の四

他ハ高サ五間奥行八間俗ニ御藏洞ト呼
ブ僧空海參籠シテ難行苦行途ニ虚空藏
求聞持法ヲ大悟シ佛道三昧ニ入りシ處
ナリト

室戸岬燈台 (岬頭)

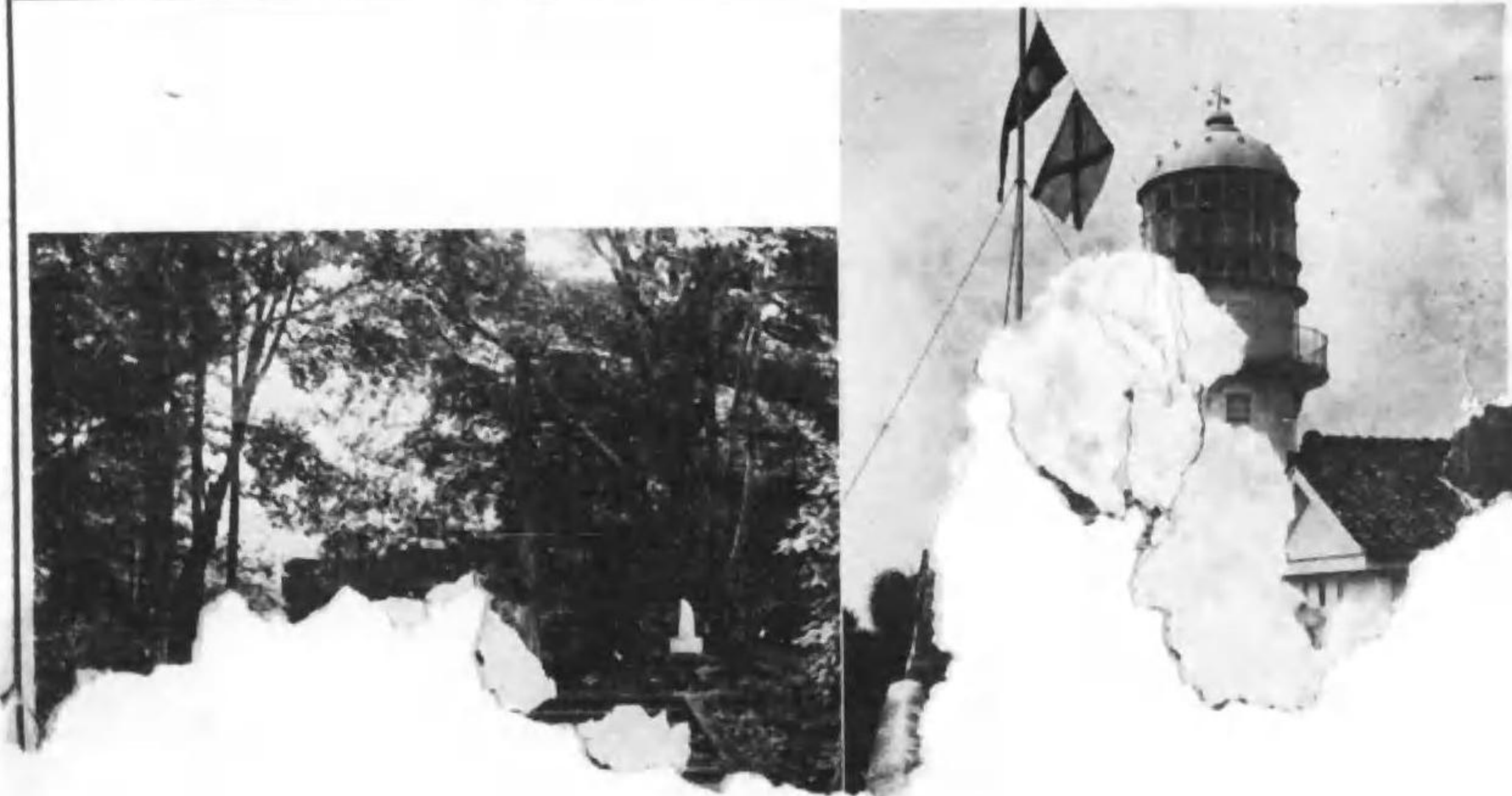
明治三十二年ノ建設ニ係リ光達距離三
十哩白色廻轉十分毎ニ一閃光ヲ發スル
一等燈臺ナリ此ノ附近眺望極メテ雄大
ニシテ天氣晴朗ノ日ハ東遙カニ紀州ノ
連峯ヲ望ミ西遠ク雲烟渺茫ノ彼方ニ足
摺岬ヲ指シ得ヘク一望ノ洋上漠々トシ
テ水天ニ連ナル

最御崎寺 (岬上)

室山明星院ト稱シ俗ニ東寺ト呼ハル大
同二年空海ノ開基ニ係リ四國靈場二十
四番ノ札所ナリ開基前空海若年ノ頃修
法悟道セシ靈地ニシテ空海ガ如何ニ此
地ヲ憧憬セシカハ紀州ノ高野山ニ先
ジテ本寺ヲ開創セラレシニ依リテ觀ハ
ル寺藏ノ木造藥師如來外二軀ノ佛體ハ
國寶ニシテ殊ニ大理石造如意輪觀音半
伽像ハ優秀ヲ以テ聞ユ



上右 中岡慎太郎先生
上左 空海修法の遺跡



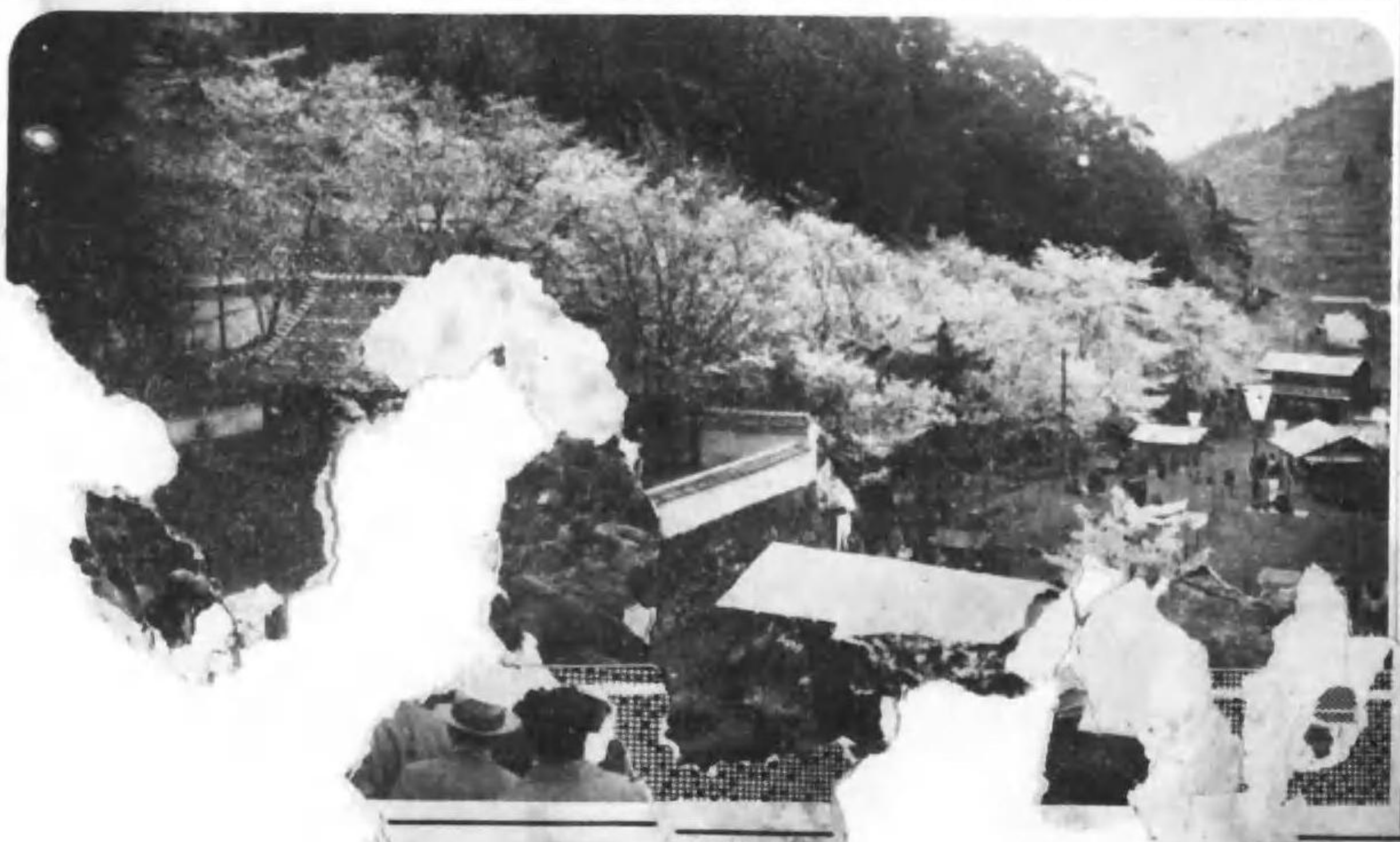
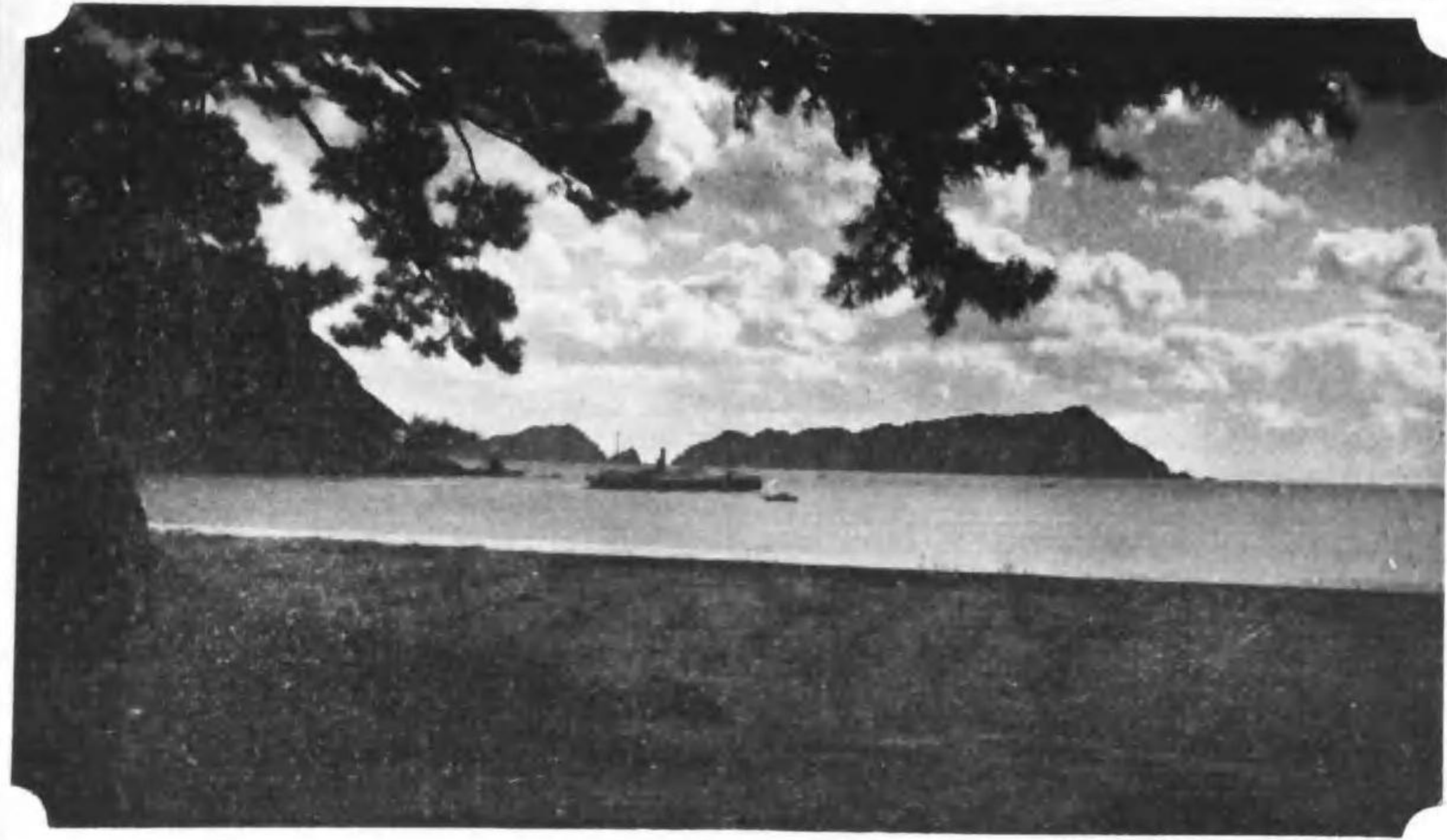
十二、高知市以西の名勝 其の一

須崎港 (高岡郡須崎町)

入江遠ク浪靜カニ水深ク天然ノ良港ニ
シテ高知ヨリ西部沿岸各地ヲ經テ九州
細島ニ至ル沿岸汽船ハ毎日上下二回此
處ニ寄港シ鐵道ハ高知ヨリ通シテ岸壁
ニ達シ海陸ノ交通至便ナリ本縣中部ニ
於ケル海産物ノ集散地ニシテ縣水産試
驗場アリ

佐川の櫻 (高岡郡佐川町)

佐川町ハ舊藩時代ノ家老深尾家ノ采邑
ノ地ニシテ本縣西部ノ名邑ナリ全町櫻
樹多ク就中奥ノ土居ハ其最ナリ花時佳
客多シ



上 須崎港 下 佐川

十二、高知市以西の名勝 其の二

上 青山文庫



青山文庫

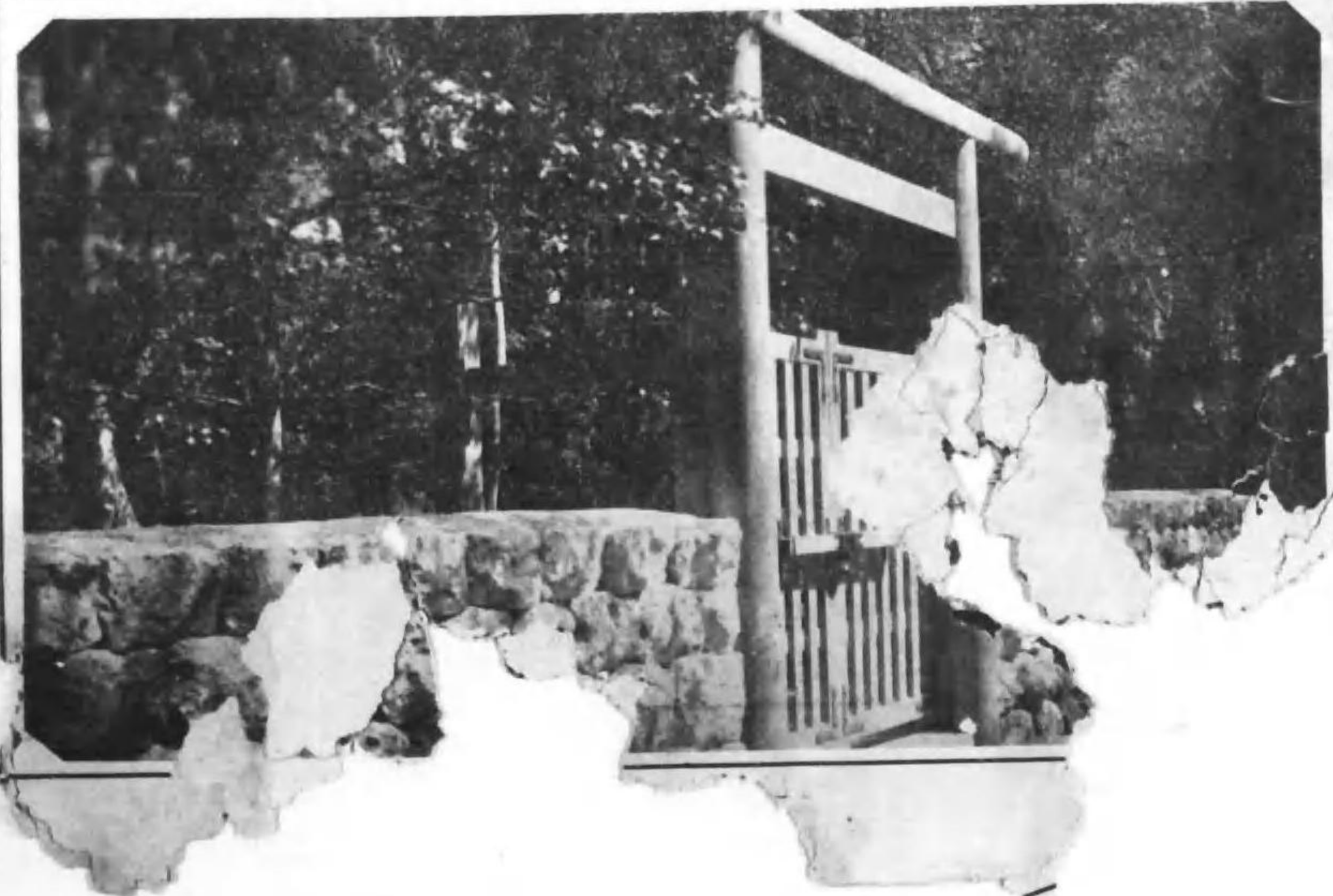
(高岡郡佐川町)

田中光顯翁ノ生誕地ナルニヨリ翁ノ首唱ニヨリテ設立セシモノニシテ翁ガ拜受ノ明治天皇、大正天皇ノ御衣其他皇室關係ノ貴重品ヲ始メ維新勤王志士ノ遺墨多ク藏書數千天下稀有ノ文庫ト稱セラル

横倉山

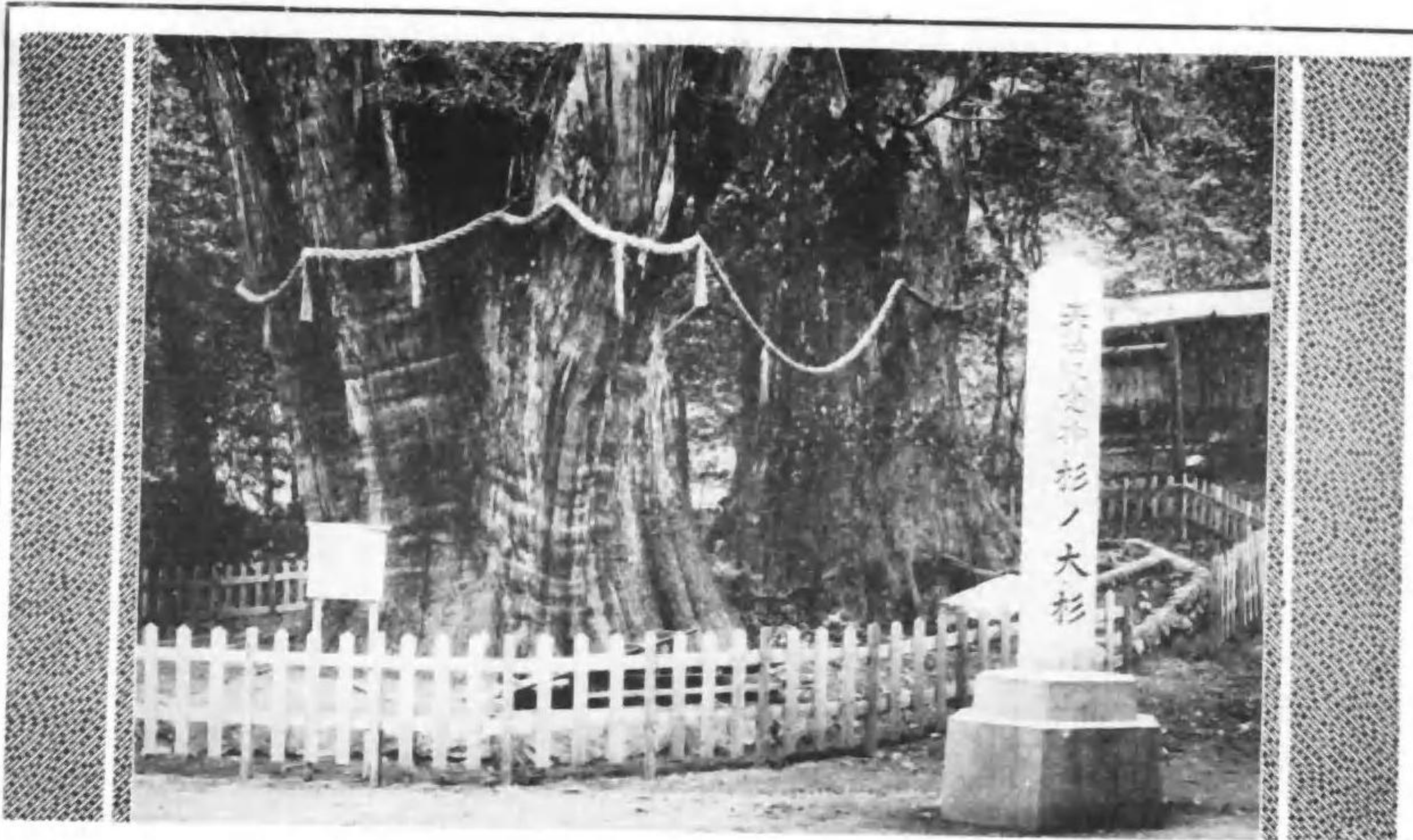
(高岡郡越知町ノ北)

海拔一千百二十米ノ峻峯ニシテ山上ニ安徳天皇傳説御陵、杉原神社御嶽神社住吉神社等アリ又我國植物學界ノ寶庫ト稱セラレ縣下屈指ノ名山ナリ



十三、土讚沿線の名勝

上 大 杉 下 大歩危小



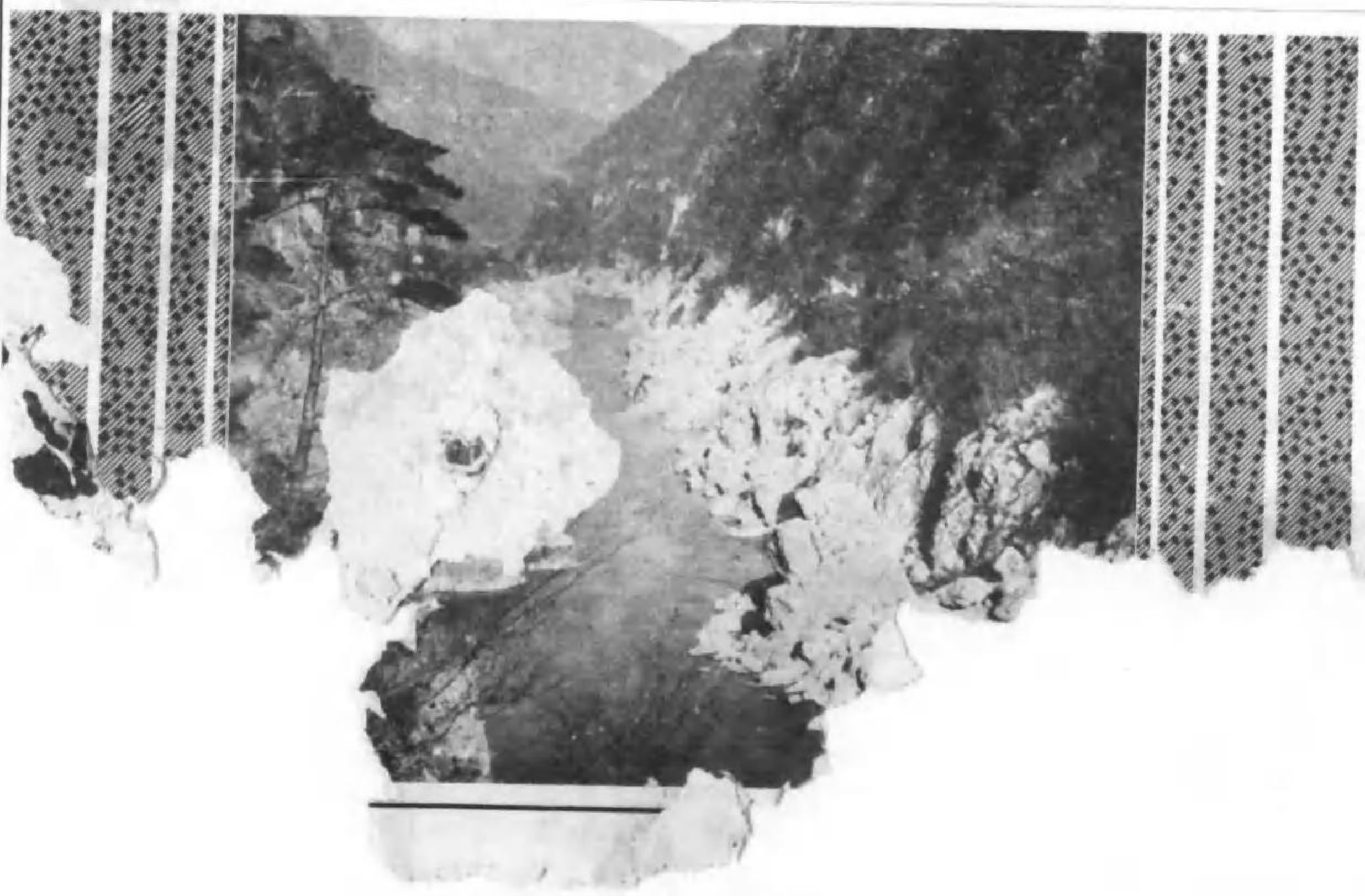
大杉

(長岡郡大杉村)

省線大杉驛ニ近キ八坂神社ノ境内ニアリ南北相並ンデ二株、南ニアルハ地上一米ノ周圍十五米高サ約六十四米北ナルハ周圍九米高サ約五十二米推定樹齡二千年我國最大ノ老杉ト稱セラル

吉野川溪谷

吉野川ハ西遠ク石槌山麓ニ發シ蜿蜒トシテ徳島ニ至リ海ニ注グ其ノ山脈ノ間ヲ縫フヤ溪谷ヲナシテ藍ヲ湛ヘ白蛇横ハリ幽邃言フベカラズ就中國境附近ハ山彌高ク谷益深ク春ハ花秋ハ紅葉水ニ映シテ美觀絶佳ナリ輕舟ニ掉シテ奔流ニ乗ジ或ハ深潭ニ漂ハバ興趣更ニ深シ大歩危小歩危ハ徳島縣下ニ在リテ溪谷美中ノ最ナリ

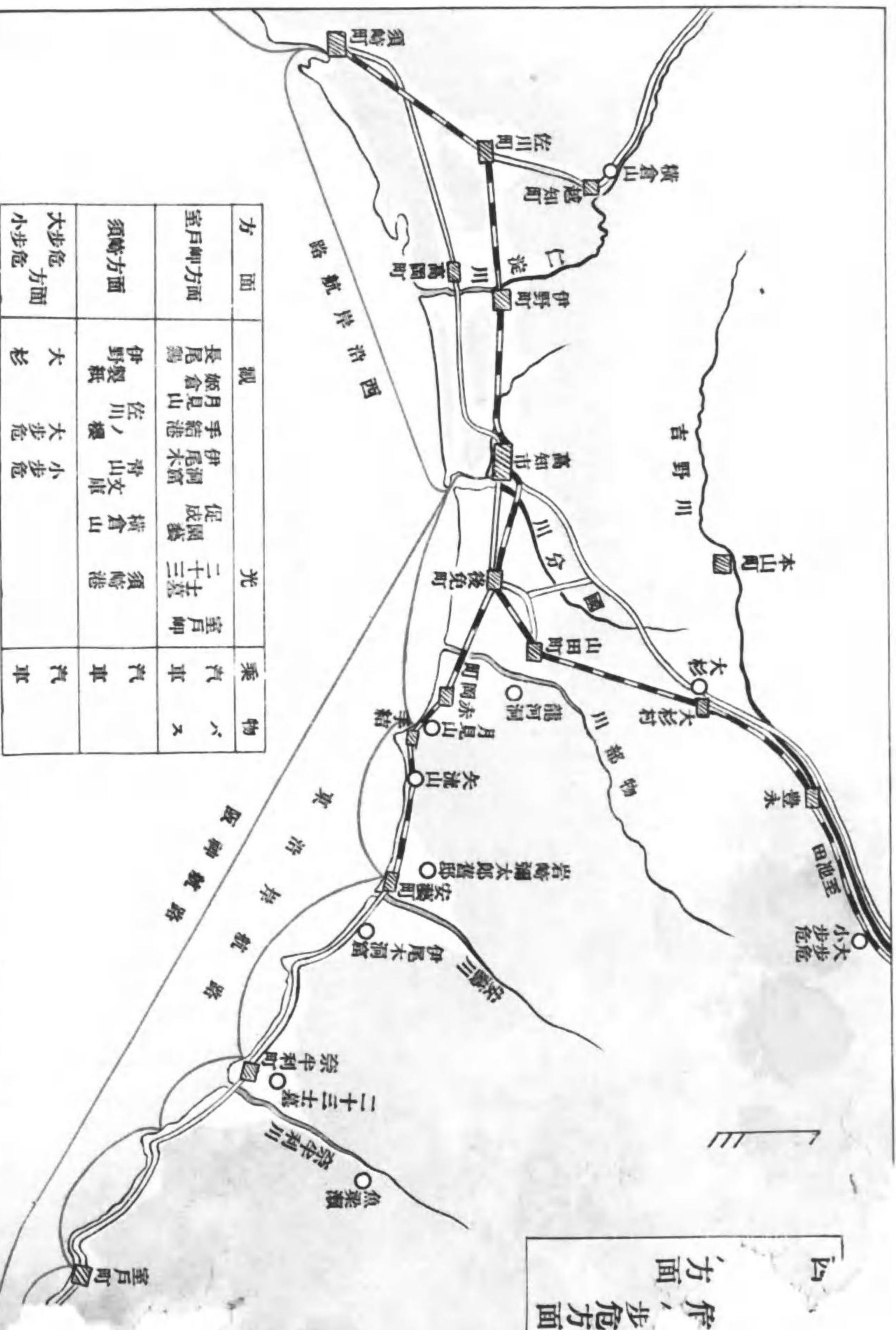


十五、土佐名物

上 長尾雞

下 闘犬

大歩危



方面	観	光	乗物
室戸岬方面	長尾鶏 姫倉山 月見山 手箱港 伊尾木洞窟	促成園 三十三墓 室戸岬	バス 汽車
須崎方面	伊野紙 佐川樓	横倉山 須崎港	汽車
大歩危方面 小歩危	大杉		汽車



長尾鶏

高知市ヲ東ニ去ル三里長岡郡大篠村篠原ノ原産ニシテ今ヲ去ル二百七十餘年前同地ノ武市利右衛門ノ創飼セシモノナリ雄ハ尾ノ長サ約二丈篔毛約六尺ニ及ブモノアリ舊藩時代藩主參觀交代ノ際槍飾ニ用ヒシヨリ天下三百諸侯ノ美望ノ的トナレリトイフ今ヤ其名海外ニ迄喧傳セラレ、天下無類ノ愛畜雜トシテ天然記念物ニ指定セラレ

闘犬

身長約四尺高サ約三尺ニ達スル偉大ナル體軀ト魁偉ナル容貌ト剛勇ナル闘争性ハ一見猛獸ニ異ナラスト雖ヨク飼主ニ馴レ群小犬ノ吠聲ヲ意ニ介セサル應揚振リハ當ニ犬界ノ覇者ト言フヘク土佐獨特ノ畜犬ナリ相撲ニ擬シテ番附ニヨリ格闘ヲ行フ勇壯比ナシ 外ニ土佐犬アリ形態小ニシテ行動敏活狩獵ニ適シ最近廣ク飼育セラレ、ニ至ル



土佐土産

高知市に於ける御土産品の主なるもの左の如し

珊瑚細工品 簪玉、根掛、帯止、カウスポタン、ネクタイ

ピン、印材、置物等

古代塗漆器 古雅堅靱優美にして最も氣品あり、硯箱、燗

草盆等

蒲鉾、竹輪 魚肉にて製造したるものにて風味よし

生果 楊梅、枇杷、栗、桃、梨、小夏、ネーブル等

促成栽培 全國稀なる温暖地なるを以て早生せる胡瓜、

南瓜、茄子、西瓜等

菓子 大つぶ、ケンピ、中華司、鯛煎餅、松魚つ

ぶ、土佐つぶ、馬買煎餅等特産品あり

玩具 木製かへ人形、女達磨、寶舟等

杖 千歳杖（松の梢）化龍杖（一本の竹で數本の

枝を利用せるもの）

鏝節 本節、龜節、鮪節、鏝の精（鏝節の粉末）鯛

の花（蒲鉾を乾燥し削りたるもの）等

紙 巻紙、障子紙、塵紙、半紙等各種あり

土佐民謡

強はずぜよ坂本さんが グットにらんで波の上ヨサコイ

土佐の犬寄せやらいの外で 赤よはなすな白負けなヨサコイ

土佐の名物珊瑚に鯨 紙に生糸に松魚節ヨサコイ

土佐の高知の播磨屋橋で 坊さんかんざし買ふを見たヨサコイ

土佐は良い國南を受けて 年に二度とる米もあるヨサコイ

土佐のさんごは情の玉か 君の身に付きや色を増すヨサコイ

鰯大漁ちや土佐節日和 逢ひにごされや滑つたひヨサコイ

土佐の炭には情がござる 胸の思であつくなるヨサコイ

土佐の魂こもつた斧で 打てば木がなる山がなるヨサコイ

酒は土佐酒男は龍馬 海にや黒潮流れよるヨサコイ

西瓜千貫つんで出る船に 吹くよ土佐風春の風ヨサコイ

土佐に育つた眞珠ちやけれど 今ちや都で玉のこしヨサコイ

土佐茶よい香ちや殿御にのませ こよい眠らで話そものヨサコイ

土佐の半紙に戀といふ字書いて 鼠鳴きすりや主が来るヨサコイ

月もねむるか浦戸の海で 波をまくらにゆらくとヨサコイ

室戸岬をどんとうつ浪の 音もひびくか雲の上ヨサコイ

昭和十二年三月三十一日印刷
昭和十二年四月四日發行

（非賣品）

編輯兼 高知市北本町一丁目百八番地
濱田 稔

印刷者 高知市本丁筋四丁目百番地

野町 傳次

高知市本丁筋四丁目百番地

印刷所 野町印刷所

高知市役所内

發行所 高知市教育會

終

